

川柳塔

昭和五十四年九月五日印刷
昭和五十四年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六二九号



日川協加盟

No. 629

54年度二賞発表

十月号

54年度二賞発表句会と

同人総会

川柳塔社主催

日時 昭和54年10月7日(日) 午後一時開場

会場 なにわ会館—大阪市天王寺区石ヶ辻町三八—(近鉄上本町六丁目から徒歩三分) 一目標近鉄百貨店

(電話06・772・1441番(大代表))

▼同人総会は午後2時〜3時30分。(同人総会の案内状は出しませんが役員改選等、出席者によって採決させていただきます)

▼式次第—司会・西田柳宏子—開会の辞・川村好郎—挨拶・中島生々庵—議事△①会計報告・若本多久志②役員改選③事業経過報告・西尾葉④質疑応答—閉会の辞・菊沢小松園。

懇親宴 同会場で4時〜5時(会費三千円) 同人以外の方のご出席歓迎。

▼二賞発表句会は5時50分から。

柳話

中島生々庵

兼題

路郎賞・川柳塔賞表彰

「地下鉄」

「恩師」

「続く」

「大声」

児島与呂志選

橘高薫風選

若本多久志選

西尾葉選

席題 二題と選者は当日発表(各題三句以内)

会費 五百円。

つめたさに、おいしさをそえて……………

アイスクャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイ



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーゾマ店
近鉄(アベノ・上六・奈良・東大阪各店)
京阪モール なんば新川店 虹のまち鹿鳴
中之島サン・ストア 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店



大 阪 ・ な ん ば



TEL (641) 0551

一つ 違 い

8月19日、せんばの宣介さんがなくなられた。先年脳血栓でたおれた後、懸命に療養につとめられて最近は今程恢復されて居たのに暑さのためにか、急に衰弱されたらしい。

生れ年が一つ違いで私が年下。どこことなく気が合つて、気むずかしい点や、酒に弱いけれど酒好きだったことが似て居た。私のすめて数十年の喫煙をブツツリ止めたのには、まさかと思つた私の方が驚いた位で、本人も

言い出せぬ未練を医者に見破られ
唇嚙んで男他人の知恵を借り
何の因果かこれみよがしの日本髪
真面目人間ここに極まり夏終る
宣介さんを悼む二句
お浄土へ来ても一杯の猪口に酔い

意志の強さを自慢にしながら体の調子のいいのを喜んで居た。どこか古武士の風格があるかと思つと茶目つ気もあり、時によると悲劇的影のたゞよう寂しがりでもあつた。路郎先生とも気が合つて、よく酒の場などつき合つていたし、又先生に対し深く畏敬の念を持っていた事も私達の記憶に鮮かである。惜しい人間を失つて私も寂しい。ここからご冥福を祈る。合掌。

中 島 生 々 庵

川 柳 塔 十 月 号

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

(路郎)

私の句

行李一つハワイに根を張り曾孫でき 前山 北海

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵・表紙直原玉青

一つ 違い

中島生々庵 (1)

川柳への道

浜田久米雄 (2)

誹風柳多留廿五篇研究

(二六丁)

紀内恒久・鈴木 博美・八木敬一・西原 亮・青木迷朗 (30)

川柳塔 (同人作品)

若本多久志選 (4)

水煙抄

川村好郎選 (32)

柄井八右衛門の家系 (川柳太平記⑭)

東野大八 (28)

秀句鑑賞

(同人吟)

阿萬萬的 (38)

愛染帖

(水煙抄)

中川晃男 (39)

「旅人」は消えない

橋高薫風選 (44)

54年度路郎賞・川柳塔賞発表

高杉鬼遊 (40)

川柳への道

浜田久米雄

何年か前に私の町にある中央公民館に将棋の大山名人が講演に來られた。大山さんはどんな話をされるのかというので大勢の町民が参集して講堂は満員となった。私も参集した中の一人であつた。

大山さんは朴訥な調子で約二時間に亘つて子供時代から今に至るまでの経験を元にして話を進められた。その中で私が聞いていて特に感銘を受けたのは次の一節であつた。

大山さんは小学校時代から将棋が強く、近所の大人連中と指しても減多に負けることがないという生まれつきの才能を持っていたのである。そこで父親がこの才能を更に伸ばすべく将棋のプロとして身を立てることにになり当時の金で二十円の将棋の駒を買い与えて京都の木見八段の許へ十二歳にして弟子入りをすることになった。

さて木見八段の許へ入門したもの、掃除や洗濯、使い走りなどの雑用を与えて将棋の手ほどきは一切してもらえなかつたのである。

阿波おどり川柳大会……………河内天笑…(42)

路郎賞作品を推して……………西尾 榮…(47)

「麻生路郎」刊行記念句会……………不二田一三夫…(56)

岡橋宣介さんを悼む……………西田柳宏子…(61)

雅号ぶっちゃけばなし……………前山北海…(51)

初歩教室……………本田恵二郎…(50)

大萬川柳「刺 激」……………川村好郎選…(52)

柳界展望……………(54)

本社九月句会……………(庸佑・整理)…(58)

各地柳壇(佳句地10選)……………津田与史選…(62)

「往復ハガキ」……………錦織文子選…(48)

「秋」の空……………藤岡花梢選…(48)

「原子力」……………福田丁路選…(49)

編集後記……………(一三夫・葉子)…(69)

座右の句

向い風いたわり合うて老夫婦

(生々庵)

私の句

つかんでた筈を手品に胡魔化され

新 岡 回天子

そこで大山さんは外の弟子が先生と対局して
いるのを観察したり、新聞に出ている棋譜を
読んだりしてもっぱら研究に努力した。そこ
へ持って来て大山さんの頭はすば抜けてよく
前の棋譜(将棋の対局の手順を写しとった記
録)は一日二日経っても頭の中にあり、それ
を思い出して記録に残すほどであった。

かくて大山さんは木見八段から一手も教え
を受けることなく見たり読んだりして自分の
力を徐々に加えて行つて将棋界に君臨する大
成を見たのであった。私はこの努力はあらゆる
世界に当てはまるので川柳の世界にも通用
するものであると考えるのである。

川柳を作っている人の中で句会で没になつ
た句を取り上げて何故没になつたかを批評し
てもらいたいという希望がある。句会では選
者を定めてその題は選者に一任することにな
っている。没になったのは選者の選句眼から
離れていたという証拠であり句を作つた人の
力が足りなかったということになる。川柳で
上達しようと思ふならば人の力を借りること
なく自分の力を十二分に發揮しなければなら
ない。大山さん程のよい頭の持ち合わせはな
くとも川柳の雑誌を読み句会に出席し新聞や
雑誌に投句しながら川柳への道を突き進んで
研究することであろう。川柳への道は長くて
険しいものである。



若本多久志選

西宮市 藤村 女

木の葉もる斜陽も秋の三千院

むらさきのささやき桔梗露にぬれ

つつましい笑顔苦勞は言わぬ母

素足白々と女へ秋匂う

岐路にたつ心仏間へ灯を点す

鍵っ子の無口へ淋しい秋の雨

鳥取県 川崎 秋 女

しあわせがまだ残っていた掌に

六十に六十の夢まだ老いず

真白にイカ干しあがる海の晴れ

生ウニの珍味に明日を貯える

しあわせだナア思う心に幸が来る

虫鳴いてひとりの夜を素敵にす

倉敷市 水粉 千 翁

踏み外せない片道を生きのびる

二度三度振ってる底のない銚子

遠雷を聞く夕顔の白に燃え

川ある日ひたひた流れねばならず

待つ人へ待つ間の迷いたかぶりぬ

伊丹市 樫谷 寿馬

人肌のお爛でいのち温める

盃の底に戦闘機の残骸が

塊が咽喉過ぎてゆく訣れ酒

邂逅のビール枝豆を真ん中に

通夜の酒仏の温か味で重ね

堺市 高橋 千万子

爪たてて蟬のぬけがら何をまつ

朝帰り犬も細目をあけただけ

二三通子の便りから封を切る

肩書を取ったに肩を借りにくる

蓮の露硯に受けて詩情もつ

富田林市 岩田 美代

山百合が開いたような噂聞く

蟬時雨に生き甲斐を聞いて見る

きりぎりすまだ生かされている茄子の色

返り花儚ない命の彩炎える

古ぼけたバッグが喋る昔むかし

西宮市 島 居 百 酒

若い気へ齢の体力妥協せず

死亡欄俺より老けている安堵

拳骨を笑って憫ぶ亡父の忌

子の嘆亡母の仕込みが染みている

風の音日本の音色で鳴る軒端

尼崎市 黒 川 紫 香

流しソーメン一筋がうまく逃げ

隠居して金にならない役がつき

心持よく酔い善人をさらけ出す

お食事はここだと定観バス止る

赤鉛筆売れて競輪ある日なり

高槻市 若 柳 潮 花

火振り漁東の空が白らみかけ

雑草が覗く小町の化粧井戸

十六夜の月へ野点の釜をかけ

鈴なりになって秋待つ銀杏の実

落ちて死ぬ蟬を夕陽が染めている

神戸市 仲 どんたく

合掌の子と対話する父の墓

特権のようにヤング ヤングの肩を抱き

大阪を浪速に帰えず船渡り

年金を蝕む趣味を追いまわし

団地にもコミュニティと云う盆踊り

八尾市 大 路 美 幸

生き方を変えても祈りはただ一つ

古靴の重さに祈りの日々がある

みそ汁の湯気に祈りがこめてある

淋しさに祈るしかない破れ靴

忘却の二字を見つめている祈り

出雲市 原 独 仙

うなぎ屋が握れば麻酔かけたよう

躓ずいた小石に罪はなきものを

夏祭り花火へ遠く恋夢中

天と地の恵み喜寿まで生き伸びて

汗となる素を一気に中ジョッキ

大阪市 江 城 修 史

桶となる妻を救いと思うとき

会者定離掌の温もりを忘れかね

わが道を行く子の笑顔に支えられ

媚振ってまで埋めたい溝でなし

ひと言のあれから遠い人となり

松江市 小 林 孤 呂 二

申し出が叶う日うまい酒にする

幸せはみどりを飽かず見つづける

朝粥を好む日々なり老い兆す

下町の情緒を残す下駄の音
本当の恐さを虎は逃げて知る

鳥取市

両川 洋々

廃線のレールも貨車のリズム恋う
稼ぐだけのわたしで駄馬の血を憎む
政治家のセンスへ疑問符ばかり抱く
医者だけの秘密カルテに癌と書く
圧力という札束へおんな脱ぐ

鳥取県

鈴木 村諷子

私にも聞かそうために言うてみる
肩書を取ればおっさん凡夫なり
子ひばりの胸にふくらむ碧い空
百姓が農衣を着るにはばからず
駅の名を呼ぶ引き声に旅情あり

大田市

藤田 軒太楼

一徹なとこが時流に乗り切れず
情熱はひと一倍で金がない
反骨のハッスル小石に蹴つまずき
穏やかに訓して筋は通しとき
とつときの奥の手点火の機を狙う

岡山県

嘉数 千代香

朝露を踏む地下足袋に詩がある
騒音を知らぬ故郷の山清水
耐えている心を狙に刻む
背むかれることのみ多き世に疲れ

馬鹿になる事がこんなにもつかしい
桜井市

岩本 雀踊子

かくて男酒に心うばわれる
手に握る小さな欲はかくしとく
手のひらを重ねて男負けている
真心にふれて明日を考える
見た通りの男で飲み干すコップ酒

倉敷市

野田 素身郎

晩酌はできぬ仕事を持ち帰り
立ち食いそばお代りするも旅の駅
ファイナーレ踊り子の汗玉と散る
熱帯夜不倫なことを考える
残照を背に白髪のふえた父帰る

松山市

谷 真風

恋もなくココロののどの音
衰えを脚に感じてさびしかり
出した茶も飲まずに貸せという話
国富んで民にかまどのないくらし
べんちやらでよし札状がすぐに来る

東大阪市

市場 没食子

継ぎはぎのドラマの一生まだつづく
長患いポックリさんをつい愚痴り
ストリップ劇場へ喜寿もついてゆく
舌も足も百薬の長乱れさせ
仏心の上に慾心まだあぐら

岡山県 出原敬一

療養所前でかばそい声が降り

本力のすぶりへ犬も真顔なり

女上位の音でわが家の戸が閉まる

悲観的ぐちが蒲団の地図を干す

休みに来た義母庭を掃き縁を拭き

堺市 藤井一二三

涙呑む球児へ拍手も泣いている

野を恋うる声で虫の値が決まり

嬉しい記事が話題朝餉のパンを焼く

温度計の暑さ返事を声にせず

ふる里へ錦新車で飾り

兵庫県 遠山可住

風鈴の音がえり足にこぼれ落ち

熱燭が好きなどつちも折れて出ず

浴衣着て歌磨呂風に座って見

お月さんだけが立秋の顔になり

気まぐれな月デカンシヨを唄ってる

和歌山市 津田与史

のろのろと歩いて牛は生きている

マンシヨンに行水をする場所がなく

考えてみれば平凡だった僕

幼き日がふと懐しく花火買う

取越し苦勞みんな裏目となって古い

今治市 越智一水

落着きがないと子という妻の留守
逢うて来た着物母にしまつさせ

子に油さされ歯車まわり出し

荒れる日の海キバをむぎキバをむぎ

どこでどう消えたか夏の金は消え

倉敷市 小幡里風

ひまわりの青春八月の陽に媚びる

実のなる木夫婦で汗をかいている

子に残す構図二人で彩を撰る

母癒えていま狙のリスミカル

この辺で盃伏せるマイペース

和歌山市 内芝としよ

叩かれて弾む手毬の性欲しい

本当の事云えて女房古くなり

川底で生きねばならぬ貝もある

亡母の汗隠んで子の為流す汗

トゲのある花でスリルも味える

米子市 八木千代

控えめな塩に細腕満ち足りる

夜嵐に乱れて砂丘紋を生み

譲られた道へ謙虚な白い杖

兄弟の個性へおもちゃ買ひ分ける

胸突八丁ははの折りを杖として

倉吉市 奥谷弘朗

信念を貫き通した白い杖

一筋に打込むものを持てる幸

しんみりとやる気にさせるお人柄

挨拶が忘れられてる販売機

性格が正反對で居て夫婦

青森市

工藤甲吉

なんにも無くて米だけが余る国

一城の主なれどもウサギ小屋

働いてくれた手足と湯につかり

搾るだけ搾れと牛は目をつむり

四苦に四苦あつて世の中楽でなし

大阪市

金井文秋

省エネに自転車誇りもつて乗る

誘う風あれば炎えたつ火種持つ

正直に生きるにさえも要るルール

足腰が痛んで父の齡を越し

腹に一物抱いて笑顔を忘れない

島根県

錦織文子

一人だけで炎えつきる愛もある

限りある虫の命が灯を慕い

薄く着た夏へ女が未だ残り

入道雲の果てにのぞいた秋の涼

傷心を包むエプロン白すぎる

岸和田市

高橋操子

蒼い空かける夢ありきまぶたとず

焼きなすのにおいも味の中に入れ

来年は古希ネエと娘知っていた

通じ合う感激きく人唄う人

舞扇女一人は意地で生き

八尾市

香川酔々

俗名の他に文字なしさぎよし

金魚にも女難・網難うろこ剥げ

山の子が海の便りを書く渚

うたかたの世に蒸発の謎がある

飛鳥には飛鳥の歴史雲の峰

和泉市

西岡洛醉

実直の歩幅大地を押し歩く

男今日手持ち無沙汰にある焦り

方言も三人寄ればよく喋べり

二杯目の水割り満足駆けめぐる

しのび寄る秋風女の化粧乗る

八尾市

高橋夕花

ばらばらな家族の時計に合す母

茄子の色きれいに漬けて母ゆたか

夕立のように癒えぬ胸の傷

はすの花無我の心にてひらく

青春の詩ばかりなり伝言板

大阪市

本多柳志

小瓶で足る晩酌に酔う自嘲

まだ何か得たいと探る新刊書

七人の敵へもかくせない笑顔

喪の女へ罪なテレビのメロドラマ
蟬哀れ其の短命を鳴きに來る

大阪市

川口弘生

お賓頭廬様へ忸怩の有髪の僧

早熟も晩成もあり人生譜

ノラの船に選民思想がのつている

じつくりと聞いて口車から降りる

仏さんあきれる顔はもつて居ず

竹原市

山内静水

一夏を子供あずける父母お在す

その日暮らしをこんなに頼られて

ヒップの偉大さ頼れる妻のいて

風化してならぬ原爆忌の祈り

炎天の影動かない原爆忌

泉佐野市

阿萬萬的

道祖神よりそい雨雲見てござる

九谷焼膝をくずさぬ女に似

雲の形もうれしく大和の旅にいる

悔いのない日々とは男下り坂

水軍の島に男の祭り歌

今治市

月原宵明

やがて楯つく顔もいる入社式

かたくなな明治当字を改めず

策を練るしじま金魚の尾が光る

雑兵の憂さカラオケは知っている

酒飲まぬ日があり父に老い刻む

大阪市

黒田真砂

背かれた背を淋しい風が抱く

澄み切った眸が信じてる母の鈴

サングラスでかくす涙は色があり

待ちわびた便り嬉しい色で着き

ゆきずりの人の善意を肌で知り

島根県

堀江正朗

手に触れる広さのなかで陽がくれる

太陽の動きに従いてゆく努力

酒ちびりちびり持論は負けていず

弱点を知ってる妻が壁になり

つまりから一言に気付く老い

鳥取市

小林由多香

夢だけに終った恋の水着干す

健やかに育ってほしい乳が張り

奇形魚の泳ぎへ罪を意識する

原点へ戻れば塔の夕焼ける

ケロイドがまたも悪夢に触れたがり

宇部市

平田実男

甲子園雑感(一句)

明日があるプロとは違う球児の瞳

人間に二つの顔がある怖さ

弔問の列人柄をしのばせる

肩書きを取れば凡人にも劣り

カメラマン像拝むものでなし

竹原市

森井菁居

スランプの男がぐるぐる縄のれん

トップの座譲れば楽になるのかな

這い上がるパワーどこにも売ってない

非番日の妻の昼寝を覚ますまい

ふつふつと湧きあがるものあり墓参道

大阪市

那須好石

鎖彦改め

折り合いがついてる妻の塩加減
礼厚き男の信を裏切らぬ

傷痕は過去の痛みをまだ残す

安らぎのゴールが欲しい蟻の汗

「てにをは」が無限の言葉踊らせる

米子市

林瑞枝

手を合わす亡父分別の知恵を呉れ

語りつぐ平和の蔭の人柱

鈍行に揺られ自然の花を賞で

秋夜長合槌打ちたい寝言聞く

振り返るうしろに誰も居ぬ自虐

大阪市

河野君子

梅壺をのぞけば亡母の丸い影

座りだこ母の勲章かも知れぬ

じつとしてゐる夫で汗が不平もつ

きゅうりきさむ組上で罪も切り刻む

放たれているのに走れぬ円にいて

東大阪市

崎山美子

たわむれに妻の手をとり踏むワルツ
ジーンズが浴衣にまじる踊りの輪

法灯がゆれて故人の声を聞く

心配が子供の数だけつきまとい

動揺をかくす扇子は音をたて

和歌山市

野村太茂津

蒔きながら紀伊半島を南下する

少し未熟で確かな楽しみ抱いている

もどかしく言葉の先を領かれ

旗手になるスタミナ温存する野心

万歳は男でなければならぬ声

和歌山市

西山幸

ひとりよがりの期待へいつか秋の風

岐れ道人の表裏を読めぬまま

無為無策の楽しさがある籐寝椅子

微かにかすかに疼くものあり虫が鳴く

重いベン燃える想いに酔いながら

大阪市

小出智子

宝石売場の前でやっぱり立ち止まる

一緒には死ねない夫婦茶碗かな

男と女氷が融けてゆくように

いそいそと夫を送る月曜日

亡父を迎える部屋に明るく灯をともし

八尾市

高杉鬼遊

おんな一人どうにもならぬ雨期に入る
ふるさとの墓を氣にする風も秋
小遣いに困った亡父へ花を立て

脱サラもできぬが辞表持つている
氣狂いになれぬ真面目で氣が狂う

大阪市 山川 阿茶

ランニング文身見せて夏をゆく

子が無うてよかったと思う相談欄

スカイラブ打ち上げた国へ落ちなはれ

老の身に鞭打つ意地もあつてよし

白い雲心の雲はどんな色

富田林市 板尾 岳人

黄金の風なら何時も山で逢う

借金を返えずと急に山仕度く

父のない男が笑う山の中

冗談の一つにわたしは山男

ペーターベン金剛山は知らぬなり

大阪市 大坂 形水

夏カゼをこじらし盆中臥てしまい

夏バテにげてもん料理喰べに行く

外廻わりの日焼けではないゴルフ焼け

票欲しの握手に感激するおばはん

腹の立つことに汚職組優勢

大阪市 不二田 一三夫

お願いしましす音声多量で押し寄る

戎橋スローモーションで人動く

空腹というしあわせも日に三度

甘党はチップやるなど知らぬまま

落ちぶれて宝石さえもニセに見え

東大阪市 斎藤 三十四

冷房の外で風鈴やけに鳴る

執念の炎はタルマに目を入れる

満月を数える胸に愛宿る

太棹の靈驗沢一さんの目を開ける

西宮市 若林 草右

病院雜見

珍らしい花で廻診立ち止まり

パンのかけ窓に鳩待つ経過よし

ガス一発面会禁止の札がとれ

寝たふりをしておやすみ嬢をやりすごし

島根県 藤井 明朗

にぎやかに迎える顔も盆の駅

Uターン山のこだまへ力湧く

旅に来て男浮気を貯めている

幸せに溺れ崩れる日を知らず

島根県 堀江 芳子

共演の幸いつまでも夫婦坂

当然を内助などとは恥ずかしい

胸に釘刺されて一つ背伸びする

夫の留守せいせい出来ず待ちあぐね

藤井寺市 児島 与呂志

頼られる幸せ暑いペタル踏む
稲のびて蛙の声が気にならず
本物をそのままわかつて呉れる人
教え子の悩み他人に聞かされる

姫路市 植村 客遊子

針箱に思い出一ばいつめて嫁く
夜遊びをするから嫁はん貰わされ
脇役の方に女の子の人氣
ライバルに胸の豊さだけ負ける

大阪市 河井 庸 佑

遊びました疲れました夏休み
子も母もぼつぽつ飽いた夏休み
飲ましたら動きよるなど見くびられ
郷に入り郷に従うルール知る

東広島市 高橋 鬼 焼

流燈のひとつを探す亡母である
まよう日もあるさ明日を信じねば
アルミ貨のさびしい音で旅終る
立ち飲みを許してくれぬ妻と旅

七尾市 松高 秀 峰

人間も箸で拾われ壺に入り
人生も修理の効かぬ年になり
人好きはするが取柄のない女
甚平に着替えて父の声になり

倉敷市 藤井 春日

憎しみを捨てて心に青い空
立ち読みをするにも上手下手があり
家出の娘自由に飛べる空が無い
女って便利な涙持っている

姫路市 梅谿庵 不 醉

駄々こねる孫が一番可愛ゆうて
目の合図足が答えて行くホテル
取りあえずなどと都合のよい文句
無理言うなありだけ絞った俺の知恵

松江市 中川 晃 男

お言葉に甘えて慾な方を取り
滑り始めると早い早い老いの坂
星占いいいとこ選って明日を待ち
高校野球からさわやかな風が吹き

姫路市 大原 葉 香

許せない政治のうそへ鞭を挙げ
二度の勤め も一度男の靴をはく
転校児仲間ない日々石を蹴る
力こぶ男の意地がもり上がる

倉敷市 稲田 豊 作

祖父健在舌剣に曇りなし
老醜を嘆かず心綺麗にす
借金も父からバトンタッチされ
嬉しくて嬉しくて目を拭くも歳

鳥取県 清水 一保

人間のエゴを金魚に見つめられ
本心にふれて握手の痛い程
生き抜いて蛍可憐な灯を守り
一票へ変らないかと見舞状

竹原市 小島 蘭幸

一句生む苦しさ窓を開け放つ
日曜の朝から下手なピアノ鳴る
負けいくさ続く確かに明日がある
妻の書架俺の読みたい本がない

貝塚市 行天 千代

日本列島細かくきざんで梅雨明ける
満ち足りた朝のおぜんに茄子の色
通信簿といっしょに長い夏が来る
苛立ちに追打ちかける蟬しぐれ

島根県 西村 早苗

憎しみの眼を背なに浴び家裁出る
母と娘の思想がのぞく秋の店
秋はよし夕焼け空にトンボ追う
美しき和解姑と障子貼る

宍屋川市 柴田 英壬子

戦記読む南十字をたしかめつ
甘い筆理性をひとつひとつ消す
泣き伏しはしない性持つ女です
鈴虫が冷たい茄子のお札云う

鳥取市 有田 とし江

土用干し触れる形見に亡母がいる
開放感なぜか浸れぬ一人旅
好きな桔梗亡夫に供えて心足る
傷心の私へサルビヤ燃えている

島根県 飯塚 虎秋

多伎の夕風妻恋う波の数えうた
夕ばえの無性に炎えて疼く愛
二で割って絆は一つもやい舟
ちちははの無限の視野の愛を抱く

川西市 戸田 古方

しょうむない話のつづき思い出し
蟻よのけのけこの足のおきどころ
照るに照る生けるしよ梅雨明けて
ギヤマンの由緒コップともいえず

大阪市 北 勝美

結局は勇氣不足と云う真面目
夾竹桃平和の色を染めわけ
いらいらをみんな男のせいにする
ぶつつけた鞠はそれだけはね返り

大和郡山市 森田 カズエ

徹マンの欠伸と知ってる事務机
満ち足りた寝顔乳房をふと離す
バス待ちの椅子で一句をメモにする
よく喋る母の似顔絵口を開け

大阪市 津 守 柳 伸

七色に変わる気性へ自答する
ひと言が過ぎて貧乏くじばかり
諦めがついて貫録出来てくる
不本意な自我を責めてる終電車

米子市 石 垣 花 子

傷口を舐めて野犬のたくましい
可も不可も無く人生のたそがれへ
お茶漬に舌づつみ打つ旅帰り
姑を鬼にさせない笑顔持ち

笠岡市 松 本 忠 三

着せられた恩に報いる術もない
鈍才が嘘のつけない顔をもち
盲判押し責任を転嫁する
ためらいの肩へ頼りにしてまつせ

鳥取市 河 村 日 満

君が代が国歌で文句ない夫婦
月賦でもいかんと單車恐怖症
札束へ父に乱れのない拒絶
民宿がいいと家計を子等も助け

鳥取市 岸 本 無 人

ハンカチの白さが土用の陽をはじく
梅干しがこんなに美味しい病み上がり
心にも栄養笑顔を持って行く
天二物与えず下手な字を恥じず

松江市 梅 本 登 美 也

道化師の涙ライトがふと覗く
切れ過ぎてだんだん敵が多くなり
つながりを求めてちやばも卵抱く
候文昔の人は義理がたい

米子市 小 西 雄 々

つながりの末端までの票を読み
間違いを責めず呆けたことにする
生涯を閉じれば同じ壺の中
手の温み残るチップと気がつかず

倉敷市 藤 原 桜 山

ひとすじの香煙静かな刻をくれ
余剰米生きる権利の稲の青
男じやないかそんな言葉にくすぐられ
バレットに暑さの色が溶ききれず

呉市 横 田 英 詩

百人に好かれる顔で縁遠し
嫁った娘が女になって里帰り
猫の顔ときに嬉しいこともある
秋の詩を綴る残暑の汗を拭き

岡山市 川 端 柳 子

曲がり角とかく他人になり易し
善人の顔がかいてる下手な嘘
もえていた記憶日まわり天を向き
ほころんでくる顔よろこびごと秘めて

大阪市 室谷徹舟

残り火を燃やすハンドルまだ軽し
中元で貧者の一灯義理果す
出来た句がやっぱり選に入つてた
聞き上手相手励ます言葉選る

和歌山市 垂井千寿子

千羽鶴母の祈りの中を飛べ
歳月が父の日に亡父語る子に
瀬戸内の夕陽に心小さ過ぎ
雑草のその日その日にある主張

今治市 長野文庫

捨て球を投げる日もあり生きる道
その前夜わくわくして仕掛人
片隅で人間らしく世を終り
バーカーも無力知らない字は書けぬ

守口市 野呂右近

打たせては取る球投げるに似た処世
定退は自分で決める小商人
決意した目はまたき等しない
調子良い御世辞に心の蓋閉じる

平田市 久家代仕男

言い負けてしみじみ老の疎外感
しらせける二人へ竜の虫しきり
母の膝知らず育つて母を恋い
落丁のあまりに多き半世紀

大阪市 横地雅風

死んだかそうかで過去の人にされ
借景を守るニュースも京の価値
助かった運は泳いだ技褒めず
いたずらへこぼす愚痴には夢も持ち

柳井市 弘津柳慶

電話口の孫へ通訳がついている
父の忌へ父の軸と掛け替える
娘からの電話かあさんとかわつてよ
団扇まで合成樹脂の味気なさ

名古屋市 大林曲ん手

黙々と働く蟻の憎まれず
孫が来て笑い葉を置いてゆき
欠けてても夫婦茶碗は捨てられず
清貧に甘んじ過ぎたとは言えず

仙台市 川村映輝

満ち足りた汗猛暑を忘れさせ
ささ錦自動販売機で自嘲する
ルージュ鮮明夜の蝶に変身す
鮭の性悲し故郷で捕らわれる

竹原市 時広一路

手探りで見つけた私の道である
足踏みが続けば足も疲れ出す
無雑作に踏めば踏絵も横を向く
天井一杯夢は大きく描いてみる

大阪市 天正千梢

いいわけを土台に開きなおっている

「心」などどうでもいいのか物が豊かすぎ

道しるべに真実だけを握ってる

四角ばらずに四角い話やってのけ

松江市 柳楽鶴丸

面白くって暇をしほりだし

あるところにはあるもの二二んが八

老婆心が誤解のたねになり

いい勝ってさあこれからどうしよう

竹原市 鈴木かつ子

働いている倅に気がつかず

倅は素直な嫁と孫がいて

肩たたきされて人生たそがれる

台本のない人生の運不運

宝塚市 傍島静馬

始球式に出てから大臣覚えられ

好人物エリートコースにはいつてず

参考に愚僧もボルノ読んでおく

ふところの傷まぬ思なら売っておく

倉敷市 田垣方大

駅降りて妻の若やぐ妻の里

標準語使う故郷にとまどいぬ

あけたてにコツの要るのも旧家なり

老夫婦月に坐ってただ無言

兵庫県 北山越山

亡母の背を思い出してる丸太橋

一ト言が多いと妻の愚痴になる

父の脛これから細る娘が並び

思案などいらぬ駄馬です走らされ

岡山市 時末一灯

長病みが日向に馴れてからの笑み

川下の激みに過去が浮いている

まだましと思う二本の足があり

風の音運ぶ落葉を踏みしめる

橋本市 森脇善太

ふんざりがついてポケット軽くなる

三姉妹姉は男の風を持つ

足組めば少しは威張れるかもしれぬ

手際よく窓口閉めている役所

大阪市 神夏磯道子

急坂でふり向かぬ妻の底力

若者に夏の夜空が短かすぎ

歯の浮いたことでも書ける夫婦メモ

水中花水の濁りに気づかない

寝屋川市 高田博泉

省エネも値上げの秋がこわくなる

甲子園へ釘付けになる盆休み

体力に限界知った夏休み

虫の音へ秋のロマンが燃えてくる

松原市

北野久子

鳥取県

林露杖

やつしても世帯疲れがにじみ出る

はしたなく夫にすまぬ夢を見る

冷たさを貰いにデパート通り抜け

どしゃぶりの中をキッチリ出前来る

和歌山市

坂口公子

拗ねるように咲いてる花で高いとし

楽しさはうぬぼれ鏡”を持つている

男下駄並べてあつた佗び住まい

風鈴の音へも翔べないママとパパ

岸和田市

清野こう

三人目男安堵の娘の寢息

老い二人はつと一息孫の留守

言い出せぬ怒り日記にぶつつける

冷静になって己を振り返り

河内長野市

井上喜醉

反骨へ燃える男の意地がある

洒落た恋夜の南で待ち合せ

浮気ではなかった愛の恐ろしさ

久し振りのシャッターへ妻かしこまり

岸和田市

島崎富志子

期待した夏やせにもうらざられ

二つ三つ女の業か若く言う

何もかも娘に負けて倅に酔う

チャンネルの争い忘れ甲子園

鳳仙花散るや計報に泣く如く

幽境の古刹の流れ神秘めき

人情もソフト同行生んだ郷

弔客の涙に虚実問う勿れ

兵庫県

辻文平

チト出来たゆとりを鏡に見つめられ

骨壺の母がかさかさかと鳴る

睡蓮に今朝の主役を奪われる

葱坊主天へ競うている睦み

和歌山市

福本英子

色即是空紫陽花彩に咲く余生

未熟さを知る時一步前進し

大ジョッキ片手に娘遠慮せず

着払い大威張りでくる洗濯物

米子市

増田竹馬

満点パパ減点パパに出て照れる

他人ごとのように点滴見る境地

迷よた末補欠で出して佳句に抜け

針で突いた程のつながりで選挙来る

和歌山市

松原寿子

逢えた日の鈴はあなたの胸で鳴る

海風いであなたが側にいた目覚め

優しいあなたよ何処か冷めたいそこが好き

想い出を掘れば余情へ鈴が鳴る

松江市

恒松町紅

夏雲の去来見つめて終戦忌

この子らに聞かせたくない日の軍記

年寄りの郷愁涼み台が消え

俗界と同じに庫裡の新建材

和歌山市

若宮武雄

泳ぎ方知らずまっすぐ歩くしか

信条を雲に託そう四面楚歌

価値観の歪みを喰うへゴ胡瓜

孟蘭盆会あの人影も雲の峰

竹原市

三宅不朽

ごろりと西瓜うれたいとこで熟れ

蟬しぐれ泡立つ中にいるごとし

生きてれば女盛りをカンナ朱

干草のことさら匂う原爆忌

島根県

小砂白汀

ハンサムの首からからと風に鳴り

原点にもどる陽炎草いきれ

紙幣になる誇りミツマタ黄金色

世相とはおんな股間を遊ばせる

東大阪市

竹中綾女

わびしさの一層身に沁む夜が来る

ひとり居の一日言葉出さぬ日も

対話する夫の遺影同じ顔

髪の乱れ氣にして女だと思ふ

寝屋川市

宮尾あいき

風鈴へ気兼ねしている虫の声

満月をあびてはじらう月見草

バス待ちの背をトンボに借りられる

旅先の息子の電話へホロツとす

東大阪市

萩尾正則

太陽がこんなにうまい地下勤務

口ぐせの勿体ないを嫌がられ

二次会の席へ結論もち越され

人間の一人一人に棲む悪魔

京都市

山本規不風

氣をつけてね孫が真似して送り出す

病名に親の責任ふと感じ

ひよっとすると今人生の一〇〇点か

だとしても死ぬのは一寸まだ早い

岸和田市

古野ひで

色眼鏡かけて世間にすねている

いくつめの転機人生とはつらし

人生の重さを悟る老いの坂

時計だけ生きてる夜の無気味さ

岸和田市

狭間希久志

初恋のこの名月を想い出し

水道が暮らしのリズム変える島

風鈴も助け求める熱帯夜

三日いた主役の孫が連れ去られ

大阪市

本間満津子

ばあちゃんの長湯チョイチョイ覗かれる

いつまでと思えば愛し膝の孫
おふろやで小さな義理を流し合い
北枕西向きどうでもよい狭さ

島根県

谷岡芳枝

倅せだからいくさを語りつぐ
献体の法話に揺れるイヤリング
静寂の法話に和する蟬しぐれ
新盆へ師の跡したう子等の会

鳥取県

金川満春

老の坂意識小まめに髭を剃る
遍歴の果告白のインタビュー
なぜ急ぐ翔ない蟻のあわてよう
残火がまだまだ消えぬ身嗜み

美祿市

安平次弘道

人生に矢印はなし模索する
ワイキキも日本も同じ色に灼け
駄馬の子を駿馬にしたい塾へやる
難民のニュースへすまぬ美容食

羽曳野市

榎本吐来

大安・仏滅反撥出来ぬ年齢となり
小さい嘘見逃してやる父の肚
眩しさは蕾ふくらむ娘の水着
宿酔の頭で予算矯める悔い

泉大津市

村上春巳

可愛らし財布しつかり小さい旅
ノータイが似合うお人で話しかけ

冷房車女の温き肌にふれ
棟上げの棟梁 棟梁の顔となる

京都市

都倉求芽

お向いが遠くになった歩道橋
汗かいた分だけビール詰めている
臍ゴマを取って涼しい扇風機
風鈴の下で夫婦白髪抜く

竹原市

古谷節夫

大ジョッキ今日の興奮消えそうで
すべり込み泥んこの顔が笑ってる
丹精の百合で先祖へ会いに行き
すいか割り親子で綴る海の詩

和歌山市

浦野和子

一言が心の襷に滲みて行く
胸を打つ思わず洩らした愚痴だから
文楽人形女の業を背で哭く
露路裏の蟻つきあたりつきあたり

大東市

土岐トク子

憶い出のブローチつけて里帰り
年金の祖母孫三人にプレゼント
亡夫慕う彩とりどりの花鋏
号泣が闇のしじまを突っぱしり

大阪府

西川誓二

押し頂くほどの年金ではなし
金、金と眼がさめると喧しい
恩義ある白が黒でもご尤も

三人どころか十人の知恵を借る

下関市

国弘 半休門

両方で二ツ 五ツ子乳房なし

知恵のない子等SLが珍らしい

エネルギー不足言わずに馬に聞け

廃物でわく五右衛門風呂の良さ

八尾市

納糸 葉

父無し子強い男に憧れる

涼風を背中に溜めてベタル漕ぐ

喪に集う人それぞれの物語り

ぎりぎりの妥協クリーム色に咲き

八尾市

宮西 弥生

人の上の人に太陽悲しそう

少年の壮志は雲を汚さない

翔んで翔んで女は生活の垢見せぬ

旅人にふるさとがあり山の駅

兵庫県

藤後 実男

頂点に立てば努力の汗が引き

真黒な肌下積の職に生き

お揃いのゆかた故郷のキャンペン

鳥取市

加藤 貞山

青い目も笑顔ふりまく阿波踊り

紅提灯揺れて踊りの波も揺れ

角帯を締めてきりっと踊る女

橿原市

岩井 本蔭棒

墓場までついて来る気の後遺症

売店のパンとミルクで済ます朝
短針の歩みを喰うこと勿れ

岡山県

直原 七面山

蔑まれても生きる尊さ

曲りキュウリのように娘が拗ね

ホーホケキョウーは愛のシグナル

ホノルル市

前山 北海

客の来ぬボルノ館捨て値でやくざ買い

豪壮な宅で寛ろぐやくざボス

楽園をギャングとやくざ挟み討ち

香川県

岡田 拳法

人民を捨てる革命誰のもの

革命の怖さポート・ピアブルよ

難民の成れの果てかやわが遠祖

大阪市

欄蘭

旧式の夫婦陀羅助丸を愛用し

労働歌とつくに忘れ寺参り

闘病へ歳月待たず過ぎてゆき

大阪市

西森 花村

チャップリンの靴に似てるよ僕の靴

泣き上戸一人で泣きたし一人飲む

甲子園今日対決のスリとデカ

枚方市

宮川 珠笑

終電へ急ぐホステス母の貌

酔いさますベンチこのまま眠りたし

監督の愚痴を地下たび脱ぎながら

米子市 佐伯越子

白壁の土蔵に旧家の家紋映え
まだすまぬ月賦気にして毛皮着る

ニューモード遠く縁なく作業衣脱ぐ

玉野市 小谷仙山

次ぎの手も考えている低い腰

本当の馬鹿は人間かも知れず
野良猫に教わる事の二つ三つ

寝屋川市 江口度

一瞬の栄光へ汗のつみ重ね
流れ星先祖の墓の方へ消え

あらそいに勝って空しさかみしめる

熊野市 坪田冬花

蚤の夫婦でも二人には青い空
弱い心酔えばその時だけ天下

水ごろも良し古郷の鮎便り

出雲市 高橋可保留

口惜しさが頬を濡らした男泣き
素晴らしい夢と独りでほくそ笑む

眼鏡越しお茶のこぼれをとがめられ

兵庫県 河原みのる

鹿の子百合オシベメシベのあらわ過ぎ
宜なりや蟬が憩いぬ老の腕

兎小屋か知らねど次々建つふしぎ

唐津市 新岡回天子

マニラ・インドネシア川柳の旅(二)

赤道と思えど飛行機の冷房利きすぎる

うすぎたない帯これで巡拝許される
距離はるか土人は気安く又お出で

大阪市 神田秀峰

肝心な処であくび後を追いつ
ここと云う時五十路儘ならず

週刊誌僕の弱点笑つて

和歌山市 吉野富子

停退と云うピリオドに負けられず

暗算に強い男で利に聡く

賽銭をなげて落ちつき取りもどす

大阪市 神谷凡九郎

秒針のちよつと向うにある未来

神様の眼にやはり人間だナとしか

生きている値打へ確答を持つてない

兵庫県 大江秋月

神前で蟻はせつせと餌を運び

内孫はいいな毎日居てくれる

花火師の苦勞は知らず見る花火

大阪市 藤田頂留子

被害者の年齢無視出来ぬ厄

足音へ逃げる野良猫忍者めく

ついてない時は自販機迄故障

西尾 栞

空蟬や我七十の掌に

空蟬のすがりし脚の執念よ

空蟬を書斎に置いてみるも齡
墨すつて空蟬しばし見ていた
兄弟に哀しき蟬の思い出よ

浜田 久米雄

地に還る花は飽き飽きして見られ
言い分を寢床の中で言うて見る
老いの坂定期に注射打って行く
腹を割り過ぎて気好しとささやか
れ年金の軽さ郵便局へ入れ

本田 恵二郎

扇風機不快指数に負けている
音頭とる喉かくしゃくと豆しぼり
煙幕にする気の土産派手に買い
齒にころも着せて見合の語を探す
親枝がほどよくかばい小枝生き

川村 好郎

さまざまに読む久し振りの便り
母の忌を思い出させる熱帯夜
暗算のうまい女房に責められる
ひび入った鈴を今日も振りつづけ
我儘なひとネと女うれしそつ

尼 緑之助

吼える唄これも生きざまコンサート
東京の歌うたいテレビ押しつける
足一本残してバツタ飛び去りぬ
子雀の一団秋の陽が落ちる

足伸べて裸いとしむしまい風呂

能登路

九十九湾カメラの視点さだまらず
精霊流し心を残すうごきよう
紫陽花のあまりに鮮か平氏の血をひくか
誓子の句碑あり能登のどんづまり
千枚田能登の厳しさ聞かされる

正本 水客

唇を多少ずらして何になる

親ばなれ振り返ってはならぬ今
我を焼く煙はさぞやどす黒い
罪深い下着が風に揺れている
ばやくだけばやいて先に寝てしま

菊沢 小松園

終戦日分水嶺の如くあり

終戦日われ人生を二つ生き
近づいて声ひそめいる虎の檻
あの女はたはた炎落としく
中年や喜怒哀楽をこめかみに

橘高 薫風

新学期勉強した顔しない顔

乗り遅れ苦笑しながら腕時計
苦惱刻む一筋一筋の皺
亡き父母のロマンス偲ぶ母の命日
美しい亡母だったという思い出も

若本 多志

54年度路郎賞受賞作

略歴

島根県浜田市出身。主婦

ペンシルの

芯は脇道など知らぬ

昭和五十年六月「川柳わかやま句会」へ、出席と同時に入会。野村太茂津先生の御指導を受ける。

併せて、当時講師としていらっしゃっていた川村好郎先生の御指導を受け、五十年十一月に、水煙抄へ初投句、五十二年十二月に両師の推薦で、川柳塔本社同人となり現在に至る。

和歌山市楠本三八六―四

松原寿子

54年度路郎賞・川柳塔賞

受賞作決定

中島生々庵

54年度路郎賞、川柳塔賞の二賞決定のため
の最終選考委員会が9月3日夜、本社楼上に
於て開かれた。

ご苦労はいつもの事ながら、考えてみると
大変な作業である。各委員は数カ月に亘って
なみなみならぬ心労を結集したものを持ちよ
り、編集部で無記名に清記されてから委員長
の許に提出という手続きが、毎年くりかえさ
れる。文字どおりに慎重な選を終えて、それ
では発表致しますと委員長が読み上げる頃に

なると、さすがに緊張した顔、顔である。こ
の一瞬こそ、川柳塔の顔が浮きばりにされる
静寂と言うか、水を打ったような肅々たるも
のがあるのである。この場の雰囲気を一一般の
方にも、特に受賞者にも見て頂きたい気がし
てならない。大きな栄誉を受けられた受賞者
に祝福あれ。

54年度路郎賞受賞作

ペンシルの芯は脇道など知らぬ

和歌山市 松原寿子

持ち主の心に従いながら、少し宛身を細ら
せてゆくわが性を、いじらしく傍観しつつし
て、それでいて吾が道を往く意気地は失いた

くない。

路郎賞 準優秀作 第一席

銀髪になつたら着たい色があり

大阪市 本間満津子

老いの坂登りつめない前に、こつした安住
があるのは倅せ。彼の女の好む色はどんなか。

同 第二席

児のおしめ換える十指にある祈り

富田林市 和田維久子

句尾の祈りに母親ならではの尊さを感じる。
私もこの次は女性に生れたいとふと羨まし。

★

路郎賞候補作品

(到着順)

西尾

葉

特選

人間は数に驕れる癖を持ち

小林孤呂二

ペンシルの芯は脇道など知らぬ

松原 寿子

☆

正本水客

撫然たり年はもゆかね恋の唄

山根 白星

いつまでの女と想う春の傘

小出 智子

一言が欲しいな父の居らぬ家

梶 みどり

一つぶひとつぶの苺に春がつまつて

都倉 求芽

ことさらに友とは云わぬ友ばかり

水粉 千翁

美術館 無聊に在す阿弥陀さま

本多 柳志

コーヒーに比べ安いと値上げ論

大坂 形水

眠りたいときに眠って妻老いる

川村 映輝

寂しさを見せたりしないりんごの芯

高杉 鬼遊

準推薦

天使とは誰も気づかぬ知恵おくれ

中村ゆきを

準推薦

いつ寝ても何時起きててもよい一人

竹中 綾女

推薦句

テーブルのりんごも梨も横を向く

高橋 夕花

☆

若本多久志

推薦句

物言わぬ静物に托した心の動き、平易さと深さを持つ句として、近頃川柳塔の句は古いという一部の声に対して、この句はどうだと示してみたい。

児のおしめ換える十指にある祈り

和田維久子

準推薦句 (一)

飯塚 虎秋

陽の落ちる果は浄土か妻遠し

川口 弘生

同 (二)

子の頬を叩いた手にある痛み

推薦秀句

高橋 操子

掌に乗るしあわせをいとおしみ

月原 宵明

霊柩車動いて秋が澄み渡る

岩田 美代

友の訃へ捧げる夜とす虫の声

仲どんたく

忍従がまだ残ってた坐りだこ

田垣 方大

一期一会今日満開の花の下

村田 瓢太

まだ炎える火種をさせる薄化粧

本多 柳志

胸張って去る花道はふり向かず

藤田軒太楼

☆

川村 好郎

放蕩の旧知に似たり冬の蠅

阿萬 萬的

姉婿と逃げた過去あり養老院

出原 敬一

警察手帖ゆっくり見せては絵にならず

原 独仙

ナメクジへ憎さの嵩て塩を盛り

大矢 十郎

ナメクジへ憎さの嵩て塩を盛り

村上 春巳

準特選

感謝料で育てる子供は食べきり

小西 雄々

推選句

仰ぎ見るひとりひとりのさつきばれ

水粉 千翁

準推選句

拝まれる金になりたい金の私語 嘉数千代香
思ふよう帯が結べて他人の計 岩田 美代
ペンシルの芯は脇道など知らぬ 松原 寿子
履きよいのと替える旅館の下駄さへも

母の鈴非常出口につけてある 中村ゆきを
人形になりきる苦しみだつてある 神夏磯道子

寂しさを見せたりしないりんこの芯 高橋 夕花

本気になって己を叱つてず 高杉 鬼遊
息切れの坂に兎をふり向かず 天正 千梢
中川 滋雀

☆

橘 高 薫 風

青柿がボトリ水子を想わせた 工藤 甲吉
暮を打ちに行く囁託もあるのなり

考えるポーズで回転椅子眠る 谷垣 史好
泣き黒子しゃべり黒子もある女 野田素身郎
飲んでから話をか話してから飲みか 安藤寿美子

四季の花咲かせ一軒立退かず 北山 越山
黒川 紫香

走馬灯過去も未来も逃げ切れぬ 八木 千代
手の砂がこぼれるように亡夫の事

垂井千寿子

準推薦句

朝の風呂いざ出陣の日の男

小島 蘭幸

推薦句

銀髪になったら着たい色があり 本間満津子

〔評〕この句には夢がある。自愛の句と云うことも出来る。服飾に対する女らしい執着

銀髪の象徴する人間形成の美化完成への願
いも影ながら推量出来る。作者は盲人だから
人一倍色彩には強い感慨を持っておられるに
違いない。しかし、それを抜きにして、一般

の立場から解しても価値に変わりはない。少し
大袈裟だが、現世での「欣求浄土」の高い境
地の作品と思った。
☆

菊 沢 小 松 園

妥協する音で積木が崩される 嘉数千代香
子が走るレールの果てと信じたい

天の声まだまだ君の席はない 江城 修史
チャンとした理由があつて昼の酒 黒川 紫香

温室で花の生理がまた狂い 恒松 町紅
両川 洋々

ああノルマ花は私を置いて行く 柴田恵美子
人形になりきる苦しみだつてある

高橋 夕花

準優秀作

五線符に哀しい女多すぎる

納 糸葉

同

考えるポーズで回転椅子眠る 野田素身郎

優秀作

ペンシルの芯は脇道など知らぬ 松原 寿子

私は嬉しい!!

松 原 寿 子

九月三日夜、川柳塔社はじめ恩師であ
る太茂津先生や、その他の方々から路郎
賞決定のお電話を頂戴致し、夢を見てい
るのではないかと驚きました。

句の道は浅く未熟な私に思いがけない
朗報は、輝かしいけれど面映い路郎賞
受賞。いつまでも、変る事のない御指導
を下さる太茂津先生、諸先生方、諸先輩
の温かい御心を思い、賞を頂いた事への
ためらいを、今も後々までも考え続ける
事でしょう。

そして、創る喜び生みの苦しみを積み
重ねて、止む事がないと存じています。
最後に心からお礼申し上げます。どう
も有難度う御座居ました。

54年度川柳塔賞受賞作

一匹がはねれば

みんな跳ねる魚籠



島根県能義郡広瀬町広瀬

岩田三和

略歴

昭和六年五月十四日生、農家の次男
昭和四十二年秋 島根新聞で初活字
職業 農業改良普及員 二十五年目

川柳塔賞受賞作

一匹がはねれば

みんな跳ねる魚籠

島根県

岩田三和

☆

戸田古方

推薦 川柳塔賞候補

仁王像の阿吽の間にある笑い

推薦のことば 魚でなくとも人間にも不和雷同する弱味がありまして狭い所に押し込められると猶更。

川柳塔賞準優秀作第一席

仁王像の阿吽の間にある笑い

川柳塔賞準優秀作第二席

兵庫県 辻

文平

川柳塔賞準優秀作第二席

飛びついてからを

どうする青蛙

福山市

桑田静子

辻 文平

陰陽といい、阿吽という。安堵の笑い、笑えそうにみえないところに見つけた笑い、これこそ、紛れもない本当の笑い。

推薦 準川柳塔賞第一席候補

直線を伸ばしてゆけば下を向く

緊張すればする程、零れる、滲み出る弛みそれに気がつかない人間、気がつきかけてもソッポを向きたがる凡夫。

岩田三和

岩田三和

右の手で自分の左手握ってみる

満ち足りているから去年ふりかえり

佐々木裕

氏家洋敏

丸すぎて軽すぎて毬転がされ

辻 式

当然の娘を母はためらうて

竹内花代子

箱庭へ永住する気か雨蛙

立床 晴風

電線が唸る豆腐が売り切れる

梅本登美也

☆

黒川 紫 香

推薦句

一匹がはねればみんな跳ねる魚籠

岩田 三和

☆

大坂 形 水

準推薦

夫婦独楽今日はくるくる上機嫌

川上 富子

病氣してからいろいろの神が来る

坪田 冬花

準推薦

捨てられてすすく伸びる苗もあり

北浜 二郎

壇家には済まぬ給料取りになり
拾われるようにバートのバスを待ち

大垣たもつ
宮尾みのり

佳 句

じっとしているのに小石蹴飛ばされ

原田凡太郎

太陽に目鼻を書けば母の顔
臨月の妻にこまこま注意され

岩田 三和
氏林 洋敏

父さんが課長の会社たかが知れ

中谷 利美

何事もなかったように曲り角

古田 鈍舟

片隅に律義な父が靴を脱ぐ

梅本登美也

点滴の音泌み込ますあばら骨

山本 光男

肘張って歩けば肘が突き当る

辻 式

したたかな老いナムマイダナンマイダ

準優秀作

優秀作

飛びついてからをどうする青蛙

桑田 静子

お 礼

岩 田 三 和

子供の頃から、一茶の句に心ひかれていたものですから、川柳を作るようになり、誌上で皆さんの川柳や御意見などを読み続けている内に「愛吟こそわが命」と信じるようになりました。

句会には出席したことのない幻の作家で、こんな私が受賞とは本当に嬉しい極みです。

これからも宜しく御指導のほどお願い致します。

真先にハートがドッキン嬉しいが

松本 文子

川柳太平記 (17)

柄井八右衛門の家系

東野大八

この駄文の長講一席も、どうやら一年半がかりで、お目当ての柄井川柳にたどりついた。大変お待たせ致しましたとの御挨拶がいろいろだ。さて、いよいよ本題。

柄井(からい)家は、上方京の發生である。八右衛門は世襲で二代目。この初代川柳の幼名は勇之助、成人後は正通。

柄井家が京洛から東上した因縁は、曾祖父柄井將曹が、寛文年間に一品入道天真親王が東下し天台宗日光輪王寺御入室の際、随従したことによる。柄井家は代々禁門衛士である。江戸幕府を開いた徳川家康は、寛永二年(一六二五)十一月天海僧上の発願により、東叡山寛永寺の建立を認めた。建立地の忍岡が江戸の鬼門に当る故、そこに靈勝を設くべ

し、との天海の請願を容れたことによる。豊家滅んで十年目、征夷大將軍家康の偉勢は、忽ち諸侯相競って協力奉仕したため、一朝にしてこの大伽藍は竣工した。比叡・日光とともに寛永寺はかくて徳川幕府の三山のひとつとして永世君臨することになる。

ところでこの寛永寺だが、フタをあげれば江戸城府の鬼門鎮護どころか、実は幕府百年の対禁裡政策であつたわけだ。すなわち京の宮廷皇子を当時門跡と定めたことである。わかりやすくいえば、京都御所の皇家筆頭を江戸の寺に人質としておいておくことである。豊家滅亡政策の総參謀長で、豊家の菩提寺方広寺の鐘銘「国家安康」に藉口し、大坂城攻略の因を作つた世に有名な策士天海和尚が最

も得手とする宗門政略である。

天下の覇者家康が、豊家止きあと朝廷政策に腐心し、二代將軍秀忠の末娘和子を送り込み、その外戚になろうとするその野心の前ぶれの威赫政策が、即ち寛永寺建立という筋書となる。ともあれ、天海が自己の宗門たる台宗百年の大計を樹てた売名策とも、彼のライバルの崇伝系列が騒ぎたてても、天海にとつては筋ちがも甚だしいと彼大いにセセラ笑うの図だ。

この話は書けば長くなるが、このことから法親王東下がはじまり、以後日光門跡、輪王寺門跡は代々皇家親王と定まつたのである。柄井家は輪王寺門跡付の立場上、東下して江戸に住むのはこうしたいきさつによる。

とにかく親王東下にあたり、随従したのが柄井將曹(初代川柳の曾祖父)である。その子の図書は公允准三宮に仕え、後に寛永寺の末寺たる龍宝寺に寺侍として居住することになった。

この龍宝寺は「府内法残編」にこうある。

「龍宝寺、新堀端にあり、金剛山藥王院と号す。天台宗東叡山末、慶長四年駿河台觀音坂のあたりに草創し、寛永十二年新堀端に転せらる。」

江戸というところは、寺社の多いところで明暦大火後の新市政を布くにも、五百カ寺を超える寺院があり、その処遇が癌とされていった。このため延享二年（一七四五）には、寺社奉行を廃止し、その所管を町奉行に移した。

この江戸新市政の施行によって、各寺門前町は、行政上町名主を置くことになり、柄井図書は、龍宝寺住職の懇請によって町名主役に就いた。この図書がやがて隠居すると、長

子がこれを相続した。即ち初代柄井八右衛門で、これが初代川柳の実父である。隠居名を宗円という。随って初代川柳は龍宝寺門前町名主の三代目に当る。時に川柳は三十八歳。

初代川柳二代目柄井八右衛門は、生れつき聡明で、町政も巧みで公私共に評判が好いところから、彼の所管は龍宝寺門前町に止まらず、このほかに松源寺門前、善照寺門前、寿松院門前、桃林寺門前、金龍寺門前合せて五つの門前町差配を兼ねることになったとある。龍宝寺門前町を加えると六つの寺院門前町の町名主職で格は古町名主とみてよい。

古町名主とは何か。初代川柳が名主職を務めた頃の名主職は一口に名主といっても大変に入り込んだ格式と權威の階級性があり、内実は簡単なものではなかった。

大別するとまず名主全部を統轄する町年寄三人衆があり、これがいわば江戸市民の総支配人というところ。その下の名主にも草創名主・古町名主・それに一般の平名主の三つがおかれていた。いずれもこの名主職は世襲である。譜代・外様の扱いに象徴される幕府の由緒尊重主義が民間でも生きていたのがこの名主制度だ。

草創名主とは家康入国の際、輸送役に当った朱印伝馬役の出身で名主中の最右翼の名門格である。この名主は享保の頃二十九人だった。つぎの古町名主というのは、江戸開府以前からこの地にいた名主や、天正期の町割りや、慶長期の埋立て町割りに関与した、いわば將軍お膝元の江戸市街創生期の区域を預っていた名主連をいうのである。

こうした名門名主を最右翼にして、江戸市街の膨張拡大に応じ、各町内の名士・顔役が推されて名主職となる。いわばこれが平名主である。江戸も百万都市となるころには、こうした名主は二百五、六十人であった。人口の頭割りからすれば、今の区会議員制の頭数より遙かに少い。随って江戸時代の名主は一人で二十カ町も支配し、少ないものでも五、六カ町は普通で、時には代地や替地の関係で

はるかに離れた町差配に当る例も多い。何さま江戸市政の一番重要な役割を演じる連中だけに、今日の自治会長（又は弘報会長）のようには簡単にはいかない。江戸末期に名主世襲制改革が問題となったのもその為だ。

これらの名主は、幕府の御触れ、申渡しの下部組織への伝達、人別改め、火の元要心、訴訟万端、町奉行の管理職の形で、名主事務所は現在の区役所相当の規模とみてよろしかろう。江戸市民はこの名主の奥印なしでは、訴願万端一切何もできない仕組みであった。そんな重責を担う名主職だから、その報酬も大変なものだ。寛政年間の名主の給料（手当）の総額は二百五十二人で一万三千二百六十兩。頭割で奥印料、増役料の余徳を加えると七十兩近くになった。この名主階級の総元締町年寄三人衆となると、広大な地域を与えられ、その地代賃賃料、商権の種々の権利料などで、この御三家筋は七百兩前後とみられ中には両替屋の上を行く大名賃しもやっていた。

初代川柳の稿に名主職の講釈でもないわけだが、名主職がどのようなものか、これを概略ながら頭においておかねば、柳多留の刊行や、数多の連中から川叟と敬慕されるその名望につながらないからである。



岡 田 甫

俳風柳多留廿五篇研究

— (二六丁) —

八木	敬一・紀	内恒	久・青	迷朗
西原	亮・鈴	木	黄・室	山三
入江	勇・清	博美・岡	田甫	

468 車留かた身を広く嫁歩き

八木『広辞苑』によると、「車留」は車の通行を禁ずること。「かた身を広く」は肩身が広い、世間に対し面目が立つ、とある。

句意は、車留で車が通らず、車引もないので、悪たれ口をたく奴がいらないから、嫁はのうのうと歩いて行く、というような意味であろう。川柳における嫁は、新婚に近いという約束があり、まだういいういしさがとれていない。

のう／＼と嫁のして行く車留 傍三・15
車留心置なく嫁とをり 三六・19

普通は、肩身を狭くという言廻ししかない。それを肩身を広く、といったところが、おもしろいのであろう。

車引は、悪口をいうことに、川柳ではなっている。

車引女を見るといきみ出し 一・27
らんがしい車に娘四五度あい 天一鶴一

岡田一賛

469 楊枝で一度かみそりではづかしさ

八木 楊枝、おはぐろ。かみそり、眉毛を剃落すこと。

江戸時代、女子は婚期に到ると、かねつけ（鉄漿）を行った。これを半元服と称す。漿液は七カ所から貰う習慣があった。縁談が決まるとこれを行った場合もあり、細かい点ではいろいろな場合があったようだ。

眉毛を剃ることを本元服といい、通例は妊娠または分娩の後に行うが、相当の年齢にな

れは未婚でも行った。

女は結婚して、妊娠ともなれば、カネつけと眉毛を剃ること、二回恥かしい思いをするという句。

ふさやうじ横にうごかすはづかしさ 二三・8

きのふまで白いやうじが黒くなり 三〇・17

元ふくも後のハどうかお、いやう 八・8

花嫁を二かみそりでうりにする 一〇・14

清一賛。「はずかしさ」は礎稿の意味もあるが、容貌が変るはずかしさもある。

岡田一同。

470 ふとんを三つあたたかなやつがやり

八木―「あたたかな奴」は薄馬鹿らしい奴。

吉原の三つ蒲団を贈ったあつたかい客の句であらう。あたたかな客と、ふとんがあたたかい事をかけているのであらう。

青木―賛。「あたたかなやつ」は、ふところのあつたかい奴の意をも兼ねているのだらう。

西原―賛。ふとんを遣れぬ者のひがみ。

鈴木―同。

馬鹿ものも有ると仕立屋居所なし

室山―礎稿+青木・西原説賛。

岡田―同。

471 釣ぞめと見へ冷麦をかつぎ込

八木―敷初めは蒲団でソバと決っている。釣初めだから蚊屋であらうか。暑い時だから冷麦。

しゃの蚊屋ハ三人とねるものでなし

西原―賛。吉原の蚊屋であらう。冷麦と共に

夏らしい句だ。

入江―「冷麦をかつぎ込」の口調から、吉原あたりの蚊屋の釣ぞめであらう。

岡田―やはり蚊屋の新品。富家の掛布団も天井から釣って暑さを避けるが、これにはお祝

いはない。また吉原では行わなかったと思つ。
472 月の枕言葉くらうてありいす

八木―吉原の月の紋日の句。月の枕言葉は、和歌の方では、「ぬばたまの」・「ひさかたの」等であるが、吉原の「月見」の紋日の頃は、紋日が続くので、月の枕言葉も「苦勞でありいす」となる。

西原―賛。

八朔はひどい朔日十五日 天・一・八・五
いっち買にくいが秋の女郎也 篇・一・35

という客に対して、月の仕舞いを頼む遊女は必死である。「月の枕言葉」とは、直接の口舌よりも、「月の文」の冒頭の句と受けとりた。

月の文長さがおよそ十五尋 安四・礼3
室山―礎稿賛。やはり客を口説いているのであらう。

岡田―文でなく、やはり直接のくどき、「苦勞でありいす」の語句から見て。

473 栗餅もいゝやいや廿九日

八木―目黒不動の縁日は毎月廿八日、その帰りに品川の遊里へとまつて翌二十九日に家へ帰っては家庭不和のもとである。おみやげの栗餅に「そんなもの要りませんよ」と女房がいつているのである。

栗の餅もいゝやいや、米の餅もいゝやいや、蕎麦切素麺喰いたいな、という童謡の文句を踏んだ句。

鈴木―賛。

しわん坊つれの餅花ことづかり

くらわすばいいわだまれとあわの餅 四・19

岡田―同。

474 四丁目もまだちらほらと匂ふ也

八木―本町三、四丁目には薬屋が多かった。現在も薬の間屋が多い。その付近は、薬屋の特殊な匂いがしたのであらう。

三丁目にはわぬ店が三四けん

いわたのすだのとふさぐ三丁目 二二・12

壱町を薬ぶくろでおつふさぎ 安五仁3

岡田―同。

村田 瓢太 著

川柳生活二十五周年記念句集

「紅へにばな華」

昭和55年6月6日刊行記念句会

序文・川村好郎・編集・不二田一三夫

水煙抄

川村好郎選

大州市 横田放人

田植すみ妻の軒のいと高し
妄想が頭もたげる日暮れ時
見られてるから円満な日が続く
不本意な椅子もなじめば暖かい
下書きのない人生よ汗・涙

出雲市 園山多賀子

背に腹は換えられぬまま義理を欠く
人は皆孤独に還るルーツ持つ
道草を食った頁は伏せて置く
歳月が涙を干して盆が来る
肩の荷が下りて歩幅も崩れ出し

福山市 桑田静子

亡父の菊おすそ分けする無縁墓
下駄箱に下駄の肩身のせまいこと
オーダーは自己満足の価かも
仕方ないでは済まぬ親子の縁

島根県 松本文子

諦めを女は武器として生きる
茜雲あの日の唄はきこえない
血の色に燃えて夕陽は何を泣く
星空へ孤独の貌をむけたがる

名古屋市 越村枯梢

広すぎる海に戸惑う雑魚の群
一言が多くて遠い回り椅子
躓いた石こんな小さくて
生きている海を夜通し見てしまふ

岡山県 池田半仙

紅白の餅は吉日しか知らず
アイシャドーの巫女を神様侍べらせる
趣味追える日々好日と思いたし
待たされて値踏みしてみる応接間

和歌山県 天満三千代

消されない吐いた言葉の濃さ知る

精いっぱい鳴いて未練を持たぬ蟬
空想のどこかで願いかけている
青春へ翔けもどりたい日のあせり

もう過去は忘れましてと送り火の女
ことなかれ主義にも限度熱帯夜

痛みとの戦い妻へは笑つとく
目には見えぬ不治の鼓動を抱き退院

八尾市 高杉千歩

一対の万灯にして父母逢わせ
月光を入れてごろ寝の熱帯夜

パレットに沈む夕陽を溶かしこむ
帰省二夜喰べさすことに明け暮れる

広島市 すがかつこ

唇をつめたくむすぶ夜の写経
敗因は言えない業火抱かされて

二枚舌誰かがうまい汁を吸う

岡山市 井上柳五郎

梅雨明けの宣言遠のくもどり雨
働きのための薬とコップ酒

柳人にちさい伍健の句碑不満

米子市 青戸美佐

消しきれぬ炎を女かくしもち

「ありがとう」亡母のわかれは胸さらず
バーゲンにおどり財布が泣いている

高槻市 竹内花代子

ホワイトラブ乙女は白い花が好き
一步一步あるけば弥陀の灯が見える
悪玉の力が欲しい時もある

母となる日を指折って暑に耐える
亡母偲ぶ写経の筆もとぎれがち

民宿の膳が老にはあり余り

寝屋川市 福富隆子

救急車待つ間も指をにぎりしめ

生命の灯燃えよと願う夜明け待つ
しっかりと抱いても苦しみ消えぬなり

大阪市 林ひろこ

動と静その時まかせの日曜日

観音像詣った人へ返す笑み
霧雨へ姿隠した那智の滝

(西国札所「那智」にて)
寝屋川市 五床晴風

朝鏡女心をかきたてる

隣から朝のニュースがノックする
そろばんに合わぬ話が断われず

島根県 角耕草

粉剤の効めがとなり田へ流れ

水打つて庭は百姓らしくなし
兼農が日暮れに早く水を撒く

尼崎市 中谷利美

乗り心地試してみたい霊柩車
声だけは齢をとらない久し振り

妻と娘の料理は味ですぐ解り

東予市 小山 悠 泉

夕立へ草木一息入れた貌

働きと正直だけを子に譲り

来客へ暮しの垢をのぞかれる

唐津市 桑 原 掬 治

この蟻がなんで五階の砂糖知る

恨みごと言えぬ女の根は深し

さびれゆく浜は砂まで引いて行く

島根県 木 村 はじめ

公約の通りになればよい日本

外食が思い出させる故郷のそば

考えて置くとはいまいかくれみの

兵庫県 高 橋 近 郊

年順で上座にすわる日の疲れ

省エネへ今日もベタルを踏み続け

声落とし平家の末路説くガイド

熊本市 有 働 芳 仙

時々止まる時計の物思い

借りものという教養の箔が落ち

小銭にしか知らぬ財布の鈴であり

竹原市 古 田 鈍 舟

服をぬぎすてて吾家に涼がある

天の声拾って帰る朝の道

妥協して妥協して奈落の底を見る

吹田市 藤 原 世史春

戦友にフト電話する雨の日に

秋づけば猫まで食欲すすむなり

あの一言いわずにすんだこの平和

竹原市 古 田 寛 子

素麺をスルスルこだわりない夫婦

月見草立秋の夜は恋に咲く

富田林市 中 村 優

父と母夫唱婦隨を絵に見せる

宗教書素直に読める失意の日

旭川市 朝 倉 大 柏

ああ言えばこう切る議論組立てる

下を見てうらやむ心戒しめる

米子市 三 戸 静 絵

御先祖の家系の重み支えかね

アスファルトに真夏の足を吸い取られ

豊中市 満 仲 きく子

厄払いしたと思うとく落し物

背伸びしたあととはしんどい事ばかり

新宮市 辻 式

靴紐を締めて主役の貌になる

暖かい掌で痛いところ突いてくる

鳥取県 和 井 観 洋

保証するそんなラベルを買う女

子の夢は父が居て母が居て虹がたつ

米子市 野 坂 な み

ご先祖の仲間入りして亡夫遠く

隣室の老父の寢息に日誌閉じ

今治市 矢野佳雲

怨念の拳開くと風が抜け

来世を信じ切つて蟬時雨

鳥取県 羽津川 公乃 貴之改め

手土産の要らぬ実家で父母健在

泣いた日もなつかし姑の一周忌

島根県 星野侑正

お世辞言うゆとりも出来た新社員

体力が定年延長へ比例せず

倉敷市 中島彩平

落日に散りたる人の計を偲ぶ

歟を持つ掌に政治論疎ましく

島根県 園山 栄

過去を捨て身軽になれと云う二者

示談書の書く手が迷うさぐり合い

尾鷲市 渡辺伊津志

表札を替へ一城の主なり

せせらぎの中に息づく草の精

兵庫県 野々口 ゆう也

あんな奴向うもそんな顔をして

髪黒く描いてくれている孫の図画

羽咋市 三宅ろ亭

夢抱いたまんま七十の坂が見え

収穫の宵は妻にも酌いで飲む

唐津市 山下勝一

落ちこぼれそこだけ妻のせいにする
形式に飼ひ馴らされて大過なく

唐津市 田口虹汀

人知れず咲いても蝶は寄つて来る

向日葵に追われて稼ぐ今日もまた

西宮市 山田喜代子

守銭奴がえらいと思える日の佗し

姑の黙つて堪える時代の差

高槻市 大垣たもつ

分別という諦めが先に立ち

ポーナスが出たらし百貨店から届き

和歌山市 堀端三男

冗談にある棘だからなお痛い

石ころの角とれるまでの長い道

出雲市 吉岡きみえ

確率はないが第二のバット振る

汗ふいてふいて正午の音をきく

広島市 光井みほ

止り木の欲しい日女甘えたく

省エネヘドンとかまえる戦中派

橿原市 西本保夫

要領の悪さ今では自慢する

其のむかし書いた辞表も出さぬまま

米子市 桑原伊都

直ぐに出る水に忘れる有難さ

民宿で心のふれ合い持ち帰り

新潟県

高野不二

五割引セールいらぬものばかり
ふるさとへ夫唱婦随を見せにくる

大阪府

白石潔

白髪に童顔重なる戦友会
来年を約しておわる戦友会

大和高田市

岸本豊平次

棒グラフまつわる苦勞知らず伸び
陽に向い進めば影も素直なり

羽島市

伊藤静枝

冷房車省エネ時代の有難味
優勝のチーム明日へのバット振る

呉市

玉木志恵子

打ち明けて心のしこり解けた夜
あの人を信じて走る風の中

岡山県

串田句味地

これしきと思えば歩巾若がえる
嫁に従いて行く気になって日々気楽

岡山市

砂田静佳

古時計亡夫ときいた音で鳴る
カーテンを閉めて心を開け放す

寝屋川市

高田てまり

懐に初秋の風が落ちてゆく

山口県

高崎雀声

裁判に勝って他人の眼が厳し

岡山県

二宗吟平

相談に來た日のノック小さい音

泉佐野市

大工静子

一泊の名ごり紅葉踏みしめて

出雲市

板垣夢酔

逃げ切った日の晩酌は特級酒

愛知県

池田香珠夫

禁煙の手持ち不沙汰を蠅叩き

東大阪市

三宅哲夫

麦飯の味も覚えて世相見る
妻の眼に後ろ姿が疲れてる

寝屋川市

小林鯛牙子

横棺を入れて渦中の人となり
ベランダのすだれへちまに宿をかし

今治市

新居田胡顔子

知られない苦勞で咲いた花水
捨てておけぬ話へ腰が浮いてくる

大坂市

野田君枝

鳥取市

島田昭治

反抗期の子にまだ残る幼な顔
蔭口は聞かぬふりして話題変え

鳥根県

中森葉士人

米子市

菅井未知

尼崎市

中辻千子

大阪市

田口なりこ

年々に淋しき増える秋の空

唐津市

浜本 久仁於

生活の苦もなく犬は昼寝する

唐津市

浜本 義美

海岸が又引越しか唐津湾

大阪市

堀口 欣一

終戦日矢鱈に歩きたくなる自分

羽島市

時田 誠一

足元のぐらつきを見ず上を見る

大阪市

本多 俊子

ペランタで祭囃子を聞く浴衣

枚方市

栗林 光夫

信号でバトカー停る無事な夜

倉敷市

大森 登竜

人の口公害なみに考える

島根県

佐々木 裕

物の音人の声すら盆の音

諫早市

江副 二牛

皆んな無事それを聞き度い電話口

岸和田市

原 サヨ子

汗流し野良仕事したすがすがしさ

鳥取市

武田 帆雀

同情の裏で笑ってるかもしれない

今治市

和田 宏

省エネを抱いて議員の里帰り

倉吉市

野中 御前

今日の日をしかと掴んで陽は沈む

大阪市

藤森 小雅子

四季の歌うたう我が家の狭い庭

岡山市

清水 金太郎

友の死を今の自分に置いて見る

青森県

五十嵐 操史

耳の穴痛い噂に負けている

豊中市

田中 善四郎

顔に汗働く父がまぶしゅうて

島根県

山本 博也

野鳥求め歩く文明だってある

岡山市

花田 たけ志

この壁を突き破らねば明日が来ぬ

★

名古屋

鈴木 可香

夕茜明日も天気を約束す

赤旗に目算がある総選挙

どこまでが本音べらべら酒のせい

海の跡だったとわかる地下工事

天駆ける気分木馬のおぼっちゃん

岐阜市 市川 鱗魚

金に負けた貌がほんとの顔である

易断の髭がやる気をほめてくれ

栗便りふるさと古き友が住む

けつまずく話に干支が気に障る

大和撫子嗚呼恐ろしやブーツ履く

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

阿 萬 萬 的

保護色になる政治家の裏話

北山 越山
政治家の保護色とはダークと黒色だけと違いますやろか。外に明るい色もあるのですか
私の方がお尋ねしたいですね。

漫画見るまで こんな大臣知らなんだ

傍島 静馬

陣笠大臣が次々と誕生するので、関心が薄れて行くのも無理のないところ。

薩ばかり歩いて老犬ふりむかず

黒川 紫香

生きものはばんざいじやないが虫や動物の観察については独特のものを持つ氏が自分を静かに見つめた自己批判と受けとりましたか。
彷徨うた跡さえ消せぬ蝸牛

小砂 白汀

自己批判もここまでくれば……成程ねえ。
どっち向いてもチヨボチヨボ背伸び止めと
こう
西田柳宏子

雑草の俺、俺なりの足の跡

西岡 洛酔

自分の足跡を振り返る余裕、周囲を見渡せる余裕、みなさんのお齡ですかねえ。

あいまいで逃げ切る肚を読みとられ

榎本 吐来

じわじわと値踏されてる目に出合い

奥谷 弘朗

相手をよく見ておられる。さすが川柳人ですねえ。

六法全書愛の言葉が見当らず

杉浦婦美子

警察署にもネオン看板があがるご時勢です
ので、六法全書に愛の文字があつてもよさそうなのですねえ。

にくい程子供に似たしぐさ

島崎富志子

にくい程……なるほど、ほほえましい風景ですねえ。

合掌をほどけば自我が動きだす

堀江 芳子

女の方の眼は繊細で且つ厳しいものがありますねえ。作句態度と共に頭のさがるのを感じました。

抜け殻に二度とはいれぬ蟬がなく

竹中 綾女

土の中の生活が五年から十年、そしてひと度殻をぬいでしまえばせいぜい一週間のいのち。過去へは戻れない女の性にも通じるものがあるように思われる。

俺らしい句いこもつて俺の本

児島与呂志

ほほえましい句である。刊行記念会も終つて改めて「地下鉄」を眺めて満足している与呂志さんの顔が眼に見えるようですねえ。

人間が出来すぎていて煙がられ

直原七面山

出世せぬ楷書のような気性して

植田 英詩

人間と云うものの、出来過ぎるのも考えものらしく煙たがれたり、出世から見放されたら思ふようには行きませぬねえ。

二兎三兎追う若さだけ持ちつづけ

不二田二三夫

一三夫さん、この句は自嘲ですか。私にも同じような事が云えるのですが、お互いに頑張りましょうね。

ゴキブリの疾やさへ妻の手も早い

原 独仙

女も四十を過ぎるとゴキブリを見付けてもキヤーとは叫ばない。

このほかに私の好きな句を選ぶとすれば、贅沢なお話ですと横向かれ

小林孤呂二

喪に服す佳人の化身が黒揚羽

林 露杖

だしぬけに椿悟ったように落ち

藤井二三

たくましく育ってくれた口答え

森井 菁居

腹立たしい想いは愛情かも知れぬ

内芝としよ

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

中川晃男

子は宝 宝を守る鞭もいる

松本文子

これは愛の鞭ではなくて外敵から守るものだろうが「もいる」がやや曖昧

水中花コップの幅という自由

川上富子

コップの中だけの自由とは軟禁状態。こういう現実がよくあるものだ

童心にかえると虹が渡れそう

山根里香

この虹は理想や憧憬というものでなくメルヘン風景か

腕組んで父権を少し取り戻す

中村優

たとえそれが形だけのものであっても、腕を組んで家族のことを考えてくれる父親は頼母しい。「少し取り戻す」に弱くなった父親

像の苦笑がある

若き日の癖まで消えた老父の肩

野口美世

嘗ては堂々として頼り甲斐のあった父も老いさらばえてやせた肩に、その子等とはどんな思いをかけているのだろう。「若き日の癖」

が「肩」にかかるのでどんな癖だったのかは分らぬながら……

足だけは自信があります過疎に住む

砂田静佳

この素朴さがよい。特に老化は足からデスゾ。マイカー族御安心

角度変えて見たら世の中オモロウテ

満仲きく子

物事すべて表裏あり。裏側から見た人生は格好の川柳種……

反応をたしかめたくて握手する

中森葉士人

それがぬくかったか冷めたかったか。皮膚接触によるコミュニケーション。然し油断大敵

母逝きし年が私にあたと二年

福富隆子

お互寿命が伸びて両親の死んだ年齢を越す。然し親の残した成果の半分も成し得たであろうか。後悔しきり

有名でないが故郷の盆踊り

時田誠一

それが土臭いほどよい。観光ズレてショウ化しないところに心に残るふるさとの匂いがある

甘えぐせつけて帰った里帰り

小山悠泉

甘えぐせをつけたのは祖父母でつけられたのは孫なのだろう。そして「帰った里帰り」は里帰りした孫等も夫々の家へ帰ってしまつたと解する

老いてまだ潤滑油にもなる母であり

松川芳子

大いなる母の愛はいつも蔭で動いている

それだから家の中が丸く納まるのだろう。もつともその油は時々切れかかる虞れあり。思ひ出にまだ鼓動する老いの坂

石井さわ子

手足が不自由になる程過去の思出に慰められようとする。そして興奮する。高血圧に注意いたしましょう

孫連れが手伝に来て守りさされ

高光行有

折角手伝に来てくれたのはよいが手のかかる孫守りのしんどい事。案外孫の顔見たさに呼んだのかも知れないが

一寸声かければよいと云うお義理

園山栄

「今日は、いいお天気ですね」と云うだけで結構。隣りは何をする人ぞの不干涉もわびしくはないです

妥協したとてから風が吹き初め

有働芳仙

我意ばかり通していたのでは話合いにならぬ。妥協の真意は相手への思いやりであろう。もてあます暇のないのも幸の中

そのとおり、元気で働かせて貰えるのが何よりである。「も……の中」の表現が弱いように案外サラリとしていいのかも知れない

石井雅水

突き上ぐる涙もなく独り住む

石井多可子

ひとりばつちは本当に侘びしいもの、何の感激ももてない人生なんて

・ 書 評 ・

「旅人」は消えない

― 川柳全集 ② 「麻生路郎」 ―

高 杉 鬼 遊

この度、構造社から橘高薫風編による川柳全集②「麻生路郎」が出版された。これについて川柳塔編集部から書評を書くよう頼まれた。川柳に限らず文芸全般の書評と謂われる文章を読むことは大変興味のある処だが、書評を書くことは私にとって大仕事である。何時もの通りこの本の「あとがき」から読む。序文があればそれから読んだことだろう。俺に似よ俺に似るなと子进行

この句は句碑にもなり、路郎の代名詞にも等しく巷間あまりにも有名であるが生れた年代まで誰も知らなかった。編者は、作品を年代順に並べる必要から一句一句を調べその正確さを期したのである。労は報いられ、それは大正十五年七月十一日、第五回遅日莊柳談会で発表された作品であり、偶々編者がこの世に生をうけたその日でもあった。それは単なる奇遇でない深く怖しくさえある発見であった。編者冥利と云うものがあるなら、この収穫は正に編者冥利につきると云うべきだろう。

作品は作句年代順の筈なのに、この句を第一句目に掲げたのは編者の特別な配慮によるものと思われる。多くの作品群から掲載四百句の抽出は大変頭を悩ませたことと想像できるが、路郎川柳の詩性と格調を最も多く受け継いだ編者であればこそと納得のゆく処である。句集「旅人」の配列と違い年代順であることは、その時代背景や路郎の遍歴及び川柳感覚の流れや変遷を知るのに適している。

次に川柳エッセイがあり「末弘博士の「暴政は人を皮肉ならしむ」を読む」において、新聞が代表する「社説」よりもコラム記事に含まれている「皮肉」の発見等は認めながらも末弘博士の川柳観に対しては、俄然その認識の過ちを正し古句に劣らない現代川柳の存在をもつて鋭い一矢を放っていることは「川柳雑誌」創刊に踏切った路郎の確固たる川柳理念の現れである。

「三十年計画―田中五呂八氏に与ふ―」に於いては、田中五呂八氏からの川柳雑誌に対する批判へ、自己の考えをきっぱりと示し、

氣負立つ革新派の雄に性急的な欠点を指摘すると共に伝統派の墮落も彼我に認識させるのである。終りに「私達はもう少し辛抱強いことを心がけようではありませんか」とあるのは七歳の年長者としての余裕なのか。

「柳壇の人々・川上三太郎君」では、「名人」の看板を掲げた広告文に対し、頷き、微笑む路郎は三太郎の人となりを評価し得る親しい存在だったと思われてほえましい。

「名人団平のこと」では、句集「旅人」の自序にもある「そして川柳に一生を捧げた私は、舞台の豊沢団平へ重ねて、三十数年川柳一と筋の苦難の人生を諒としてなお生き抜く不屈の闘志を一層固くするのである。そして流す熱い涙は名人団平に対してでもあり自己の生きざまへなのかも知れない。

「机上雑然」では、日常生活のスケッチから、夢と実生活の背反相剋を披歴して、文化というものは、雑然とした中から生まれるものだと言っている。

「植物痴」では、シャボテンの好きな路郎

を知り私は変なことに感心もするのである。土居耕花氏が石を投げ七つの藁を落して、その種子を旅順から持って帰り三本の藁の木が育ち、そのうちの一本が今も堺の八木摩天郎氏の玄關脇にあるのを、私は見せてもらったことを思い出す。

「ガガーリン氏を迎えて」では、一流を憧憬する路郎の一面を伺い知ることができて面白い。英雄崇拜の幼児性は、完全無欠の悟りきった者よりも、庶民的な血の温かさがあって好感がもてる。この一文の収録は後の「妻を語る」と合わせ、今までの路郎像にない人間性を知らしめる大きな魅力である。

「南北逝く」では、文中「南北氏を奇人だと云う人もいるが、そうは思えない」と断言しているが、路郎自身と一脈相通じる自分への是認とも思える。

宿替も今度は番地ないところ

前書きのある句には多くの名句があるがその中でも秀逸ではなからうか。

「妻を語る」では、作家田山花袋氏の一文を引用した面映ゆさが魅力でもある。淡々と妻を語り自分を語るこの長文は、こしかたを振り返る鎮魂歌に思えてならない。

これが川柳の真髄！ 作句する前にまず一読を

川柳全集② 橘高薫風編 「麻生路郎」

定価千円・送料百六十円
発行所 構造社出版KK

路郎を知らなかった私が今までに先輩から知らされたことは、何時も恐い師であり、火の如き情熱の、既に大成された六巨頭の一人としての路郎であった。私は何故か、川柳を初めて間もない昭和四十一年八月のある日、生駒の葎乃先生を一人で訪ねたことがある。

何の紹介もなく一面識もない者が突然訪問した非礼は、今となってみれば冷汗三斗の思いを深くする。しかしながらそれは人格化された存在に対する小さな不満が齎した行為でもあった。葎乃先生は私のために外出を中止され対応して下さった。その時に「路郎は電車をおいて改札へ向う時には誰よりも先頭を切つて来ました」と一つのエピソードを話して下さいました。

改札を出るも先駆者たらんとす 葎乃

この一句と「妻を語る」の文中で出合った時、生駒の二階の部屋で残暑厳しい午後、ネクタイ上着をつけて正座していた緊張感が再び私を襲うのであった。

本書の圧巻は「人物像」だと思ふ。ここには七年余、路郎の薫陶を全身全霊で受けとめた編者、橘高薫風氏の面目が躍如としている。「プロローグ」から「情熱の路郎」「二つの

自序」「肉親の言葉」「路郎と酒」「路郎の父性」「路郎くさぐさ」「日車と路郎」「路郎の死」「エピソード」へと続く巨星麻生路郎の一代を詳細にして大胆、余すところないまでに路郎の両極が集約されている。「プロローグ」で路郎の幼年時代へ何の抵抗もなく引きこんでしまふ「エピソード」で天上高き雲の峰へ昇華させる技法は正に名文である。

「書簡集」は、井上信子氏宛一葉、東野大八氏宛手紙一通と葉書一葉。工藤甲吉氏宛手紙一通と葉書一葉の僅かではあるが、その折々の路郎の状況、気分等が判つて非常に興味深いものがある。これ等は編者の人柄によつて諸氏の方から拝借できたものと思われる。

「略歴」「麻生路郎の著書」は簡単なものであるが、主だったものは収録されている。種田山頭火を世に問うたのは、四国松山の大家澄太であった。川柳界では六大家の一人として麻生路郎は高く評価されてはいても、柳界を離れた処ではその存在を知られないのが大方の認識であろう。橘高薫風が一書にもした川柳全集②「麻生路郎」は川柳界は勿論、広く一般に川柳人麻生路郎を知らしめる好書と信じる。

既に読まれた方には、ほんとうの路郎を知つて頂きたく是非再読を、まだ読んでおられない方には売り切れないうちに自分の一冊として味読されることをお願いする。文の流れにより敬称の多くを略したことをお許し願いたい。



阿波おどり川柳大会

河内天笑

つたりと川柳御一行の席が用意されどっかり腰を据えるといつ動き出したかすみれ丸は一路阿波の徳島へ。大半が「新大阪連」を染め抜いた揃いの浴衣に衣替えした船内では阿波踊りの講習会が始まる。教わって

はみたものの、どだいこっちはズブの素人。阿波踊り。我流の阿呆で押し通し

こんな気分で参りました。

踊りの講習会が終るとお待ちかねのカラオケ大会。司会はOBCから応援にかけつけてこられた高井ギラさん。プロの司会はひと味違う歯切れの良さ。その上にすらりとした美人と来ているのでなかなかの盛り上がり。われわれ川柳連からは規不風、斗又柳、柳仲東雲、酔々、天笑の諸氏が出演、得意のノドを披露され全員惜しくも優勝を逸したものの拍手だけは、その数で他を完全に圧していた。中でも東雲氏のボデーアクションは満場の拍手喝采を浴びた。

カラオケが終るや会場はメインイベントの川柳大会の披露へと舞台がまわる。阿部柳太氏選の「カラオケ」に始まり菊沢小松園氏選の「一般投句者自由題」の披露まで約一時間。今日ここではじめて川柳の披露に接した一般

の方達も熱心に耳を傾けて下さった事は大変有難かったし、阿波踊りにちなんだ題だったのでより一層興味を持たれたのか傑作が出る。と溜息まじりて拍手を下さったのがとても印象的でうれしかった。ともあれ一般自由題の投句数も四十一句にのぼり、佳作が続出した事をみても潜在的川柳作家はたくさん居られるという事の「証し」にもなった。

カラオケ大会と川柳大会の表彰式が行われ坂田氏より賞品賞状が手渡され、これで船内の行事は全て終了。すみれ丸はもうすぐ小松島港へ。そして四国の土を踏んだのが五時半ごろ。浴衣に赤パンツ、せった履きの与呂志さん。浴衣の足もとが黒い革靴という小松園さん。川柳人ならではの独特のユーモアをひっつけていよいよ踊りの現場へ。貸切バスは「母」号。

阿波踊りのルーツには諸説があるらしい。祖先の霊を慰める精霊おどりから派生したという説もあるが確かなところでは蜂須賀入国によって久方ぶりの平和に民が欣喜雀躍したという説が定石らしい。

それは戦国の動乱がようやく鎮った天正十三年、戦功により家政が阿波の太守に迎えられた。その翌年に堂々と城山の緑に映えた徳

三味線に横笛カネ太鼓など阿波の徳島オリジナル。よしこのリズムにのって次々と現われるなんとか連の群舞また群舞。音とりズムに陶醉して変幻自在に乱舞する奔放な男おどり。あてやかな衣裳にこぼれんばかりの色手がたどる女おどり。とよめきが湧き拍手が乱れとぶ。強烈なリズムと華麗な群舞は寄せ来る潮騒の高鳴りとなって藍場演舞場は興奮のつばと化していった。

八月十五日正午、熱戦のつづく甲子園では黙禱の行なわれてるころ、ここ弁天阜頭の特合所では阿波踊り川柳ツアアのメンバー（男子33名、女子17名）が勢ぞろいし、柳宏子さんが早くもスナップ写真の撮影を開始、新大阪新聞社の坂田事業部長に社長の榎本仁臣氏を紹介され堅い握手のドッキング。

12時30分に予定通り関西汽船の「すみれ丸」に乗船開始。遠来の貞山氏と最年長の川狂子さん（84歳）に敬意を表す。船内最後部にゆ

島城に移ったが、その雄姿を仰ぐにつけ城下の民は待ちわびていた平穩のくらしが蘇った嬉しさに藩主をたたえて踊り狂ったというのがはじまりという。こうして大衆の中から生れて根強い力をたくわえた民謡おどりは以後四世紀を脈々と生きつづけ、今日の我が国自慢の阿波踊りへと栄光の道を歩んだのである。バスが着いた処は藍場演舞場のすぐそば。演舞場で見物する人と踊りに参加する人がこゝで別行動となる。アルコールを補給しにゆく酔々さん、食道街へ潜入する葉先生の二団、柳さんは黒塗りのリキユウを買いに、僕は白の地下足袋を求めにそれぞれ昏れゆく街に散らばる。

匂いほどうまくないイカ焼きを鬼遊さんとかじり合い乍ら踊りの出番を待つ。高張りの提灯が揺れ動く南国の空はとつぷりと暮れ果ててカネと太鼓がおなかの底までひびいてくる。地元水珠連にリードされていよいよ新大阪連の提灯が動き出した。われわれの出番である。川柳連の大半が夕食事で散り散りになり最初の演舞場へ水玉連、阿波連に応援されて新大阪連も熱気中へつけこんでいった。続いて愈々藍場熱気中へ、こゝで川柳連の迷子組も合流。賑やかに氣勢をあげる。流石一番立派な演舞場、機軸もピシシ、葉氏他の見物組の喚声が上る。やつと通り終って全員揃って記念撮影(時間は九時半少し前)……未だ踊り足らぬ顔、顔……見かねた地元連の案内ですぐ傍の踊りの広場へ……そこには幾組ものグループが思い思いに輪を作りカネや三味線に浮かれて踊り狂っている。川柳連も大張り切り。

もななく踊りの輪を回わしていた。やがて10時、心残して踊りの広場をあとに三々伍々バスの集合地へ移動を開始した。

「カラオケ」三才と軸吟 阿部柳太選
カラオケがうまいビールの味を消し 鬼遊
カラオケの間に幹事飲んでおく 寿馬
カラオケが終わるのにまだ喰ひ 天笑
カラオケへてれこな声で押し通し 柳太

「コンクール」 野村太茂津選
子の夢がおどる絵日記コンクール 英王子
コンクールL・Lサイズにある自信 柳伸
出る場所を違うてはったコンクール 凡九郎
コンクールナンバー2の難しさ 太茂津

「汗」 橋高 薫風選
汗知らぬ金は財布に落付かず 薫風
善人で一生終る鼻の汗 桐下
夏祭り日本列島汗をかき 天笑
ハンカチを黙って渡す妻の汗 薫風

「三味線」 西田柳宏子選
三味の音に孫も尻振る阿波踊り 貞山
爪弾きも聞かせてくれぬ妻の座で 柳伸
ジョングラの探北国のありったけ 柳み
不機嫌な三味線三の糸が切れ 柳宏子

「浴衣」 八木摩太郎選
青い目の今日は浴衣でする司会 栗
浴衣着てあの娘も十九の歩きよう 栗松園
赤坂の浴衣は政治の裏を見た 茂雄
宿浴衣、口説く気にもなるものか 摩天郎
「踊り」 栗選
ぎつくり腰スカット忘れた阿波踊り 西尾
生簀へ種族が生きて行く踊り 天笑
何時までも踊る玩具にネジがあり 雀踊子
甲板の踊り夕陽今沈む 邦晴
一般投句者自由吟・優秀作 菊沢小松園選

音締めにも撥さばきにも惚れている 陽山楼
夏祭り笛や太鼓に浮かれたす (小五恵美子
首筋の痛い浴衣を着せられる 陽山楼
船底も機軸もみんな踊りの場 喜波
はて腹に浴衣の帯は小さすぎ 幾代
汗かいてみんな踊ろう阿波踊り (小五恵美子
阿波おどり踊れん奴は句をひねり 仁臣
踊ってる社長やっぱりたの人 陽山楼
カラオケの歌詞を忘れたてれ笑い 昇

来春にまた新大阪新聞社と協賛で「桜まつり川柳会」を予定しています。ご期待ください。

「堺まつり」協賛

第33回 堺市民川柳大会

日時 昭和54年10月21日(日) 12時
会場 堺労働セツルメント

講演 堺市文化財保護委員 小谷方明氏
兼題 渡り 高杉 鬼遊 選
「礼」 橋高 薫風 選
「観光」 田中桂太楼 選
「物置」 岩本雀踊子 選
「証し」 室田千尋 選
「包丁」 片岡とむ 選
「敬語」 中尾 漢介 選

席題 各題3句 投句拝辞
締切 13時 堺まつりパレード見物
会費 五百円 (記念品・作品集呈)
主催 堺市文化団体連絡協議会
堺市柳作家協会

愛染帖

橘高薫風選

美しき破滅に適う立秋なり
背徳や静かに墮ちるピアノソロ

今治市 越智

一水

ヒロシマやこもやっぱり地価上る
八月の風はお前の亡き声か

今治市 青森市

藤甲吉

八月の炎「原爆許すまじ」
勇ましく来り哀しくネブタ去に

富田林市

村優

花火師は去り満天の星消えず
わたくしも鳩になりたい原爆忌

松山市 谷

真風

転校の少年太鼓見てるだけ
この暑さ暑中見舞を頂いて

米子市

八木千代

満天に散つても星座手をつなぎ
身動きもせぬ風鈴の吐息かな

八尾市

渡辺章

合掌の形で螢持ち歩く
噴煙を吐かぬ火山に鎮められ

鳥取県 島根県

鈴木村諷子

悟つてのと阿呆とはよう似てる
だるまの眼見戯にひとしと思えども

大阪市

小出智子

ほどほどと言つむつかしい唄があり
一枚の枯葉となつて眠りたし

八尾市

高橋夕花

切手一枚ことの重さに気づかない
外出の嫌いな妻の腕時計

大阪市

河野君子

子の旅の地図まん中にめしを食つ

加速度がついてきそうな坂にいる

大阪市

白石

潔

夕焼けに大志をもやす定時制
送り火を焚いて今年も慈なし

今治市

月原宵明

兵隊の過去ある父の足痛む
テープコーター押して仮面をやおら出し

町田市

竹内紫鏑

銀髪と聞く戦友に会えるドア
日本の舗装雲形定規満ち

高知市

西川富恵

山頂で不意に崩れる雲に遭う
水襲にたましい一つ沈めたり

大阪市

西森花村

炎天やみみず動ける迄動く
中華店看板になるコック居る

岡山県

出原敬一

待つ人も無き八月の花時計
原爆忌妻は遠縁の行方など

堺市

高橋千万里

少年の秘密まず赤電話から
過去を知る怖さにやめた日記です

島根県

小砂白汀

スタンドで酔うてる五百羅漢たち
蚊蚊に刺されてからしつくりせぬ夫婦

和歌山市

西山幸

喪の家の前を手紙交換車
旭川市

朝倉大柏

野心家の手で鳴る鈴も澄んでいる

藤井寺市

児島与呂志

寝そびれた夜の火花は音ばかり

五十歳金魚鉢の金魚がもしれぬ
秋へ向いて月はお化粧しはじめる

兵庫県

遠山可住

笑み給う母なる皺の深さかな
いのち乙いの虹架けて金銀の雨

倉敷市

水粉千翁

高知市

宇佐美和子

曇る日の空に落け込む月見草

鳥取市

河村 日満

人間がおどけて見える蜻蛉の眼

尾崎市

黒川 紫香

宿かりに磯の香りと月の彩

高槻市

若柳 潮花

間違いとちがうかホステス膝に来る

米子市

小西 雄々

沈黙の怖さ一人減り二人減り

三重県

坪田 冬花

何だろこのときめきは花火の夜

豊中市

満仲 きく子

老夫婦今朝もロメオとジュリエット

川西市

戸田 古方

ちよっぴりと胸をせり上げ勤め妻

島根県

佐々木 裕

聞き捨てにできない命がけの恋

倉敷市

田垣 方大

仰向けにさされてる亀の離職票

名古屋市

大林 曲ん手

ヒコウキに折って飛はない借用証

兵庫県

辻 文平

憂さ捨てる川の流れば激しくて

倉敷市

小幡 里風

三面鏡小頼な奴が一人いる

名古屋

越村 枯梢

竹の花咲いて男は墓地を買い

寝屋川市

江口 度

インペーター小さく爆破するわたし

寝屋川市

柴田 英壬子

岡山市

川端 柳子

人形の館に女主人ひとり

富田林市

岩田 美代

さまざまな出逢いもある盆灯籠

和歌山市

松原 寿子

天領へ逃げ込んで見る涙かな

宝塚市

吉田 笑女

老人と言わせぬ姑のサングラス

鳥取市

中森 葉士人

焼酎を愛して策謀なんかない

羽曳野市

麻野 秋畝

片言も云えぬに菓子味のを知り

出雲市

園山 栄

思うこと云えずにひいて見た字引

和歌山市

若宮 武雄

月下美人の末期を覗くのはよそう

山口県

高崎 雀声

農機具の支払い出稼ぎ共稼ぎ

貝塚市

行天 千代

今日生きる後何年と思いつつ

出雲市

高見 鐘堂

子にはたち父のお酒をたしなめる

尾崎市

小林 文月

避暑に来たつもりで診療うけている

島根県

堀江 芳子

盆踊り白杖いらぬしなのよさ

島根県

堀江 正朗

太陽もゆっくり昇る日曜日

鳥取県

和井 観洋

政治家が誰であろうが水が無い

京都府

山本 規不風

間違いの電話が愚痴を聞いて呉れ

ひきつめに結うのは沖繩の旅以来

寝屋川市

宮尾 あいき

敗戦記念日流星を見る

松江市

柳楽 鶴丸

びっしりと今日を埋めて男行く

和泉市

西岡 洛醉

乳児室蚤のように頭振る

愛知県

池田 香珠夫

窓ぎわの席にも花を忘れない

八尾市

宮西 弥生

頑なに書を読む背中言葉待つ

和歌山市

坂部 紀久子

販売機深夜はき出すエロ雑誌

米子市

佐伯 越子

長屋のサミット女房議長を相つとめ

大阪市

欄 蘭

空約けて夫婦寡黙に過ごし居り

島根県

木村 はじめ

スクラップ貼り溜めて繕かず

岡山市

井上 柳五郎

雑草に埋れ野仏むせないか

大阪市

北 勝美

石仏の群れへ浄土の野花満つ

八尾市

高杉 千鶴子

溜息の深さが布団に渡打たず

島根県

板垣 夢酔

あの日から素顔で通す娘のやつれ

米子市

石垣 花子

浜木綿を眩しがらせた恋幾つ

寝屋川市

小林 鯛牙子

和歌山市

福本 英子

イヤリング着けて四、五歳さばを読む

岸和田市

古野 ひで

生きたる嘘女につらい夜がある

大阪市

江城 修史

仏具磨く亡夫の愛にひたりつつ

島根県

西村 早苗

表の風を風鈴が呼び込んで

京都市

都倉 求芽

ドラマすんで余韻をささむ台所

米子市

野口 美世

孟蘭盆会けれども蚊取線香燃す

大阪市

藤田 頂留子

お隣りを見て鈍行の席をさきめ

唐津市

新岡 回天子

マネキンが一足先きに涼しがり

唐津市

浜本 義美

七十になつても余生など言うとれず

島根県

飯塚 虎秋

現とて月下美人よ昨夜の花

和歌山市

坂口 公子

ノータイで囑託と言う生字引

島根県

飯塚 虎秋

通り雨虹の雫を置いて去り

倉敷市

中島 彩平

セールスがつてきばき月賦の印を押す

倉吉市

野中 御前

倅せの裏から危なさが覗き

岡山県

池田 半仙

親も子も孫も昭和で千代八千代

鳥取市

武田 帆雀

七十三平均寿命いまだ丁度

兵庫県

野々口 ゆう也

ずたずたを繋いだ切れ目が又疼き

島根県

山本 博也

いつまでも添いとけてくれ祖母祈る

東大阪市

竹中 綾女

平仮名で綴る悲しい風を聴く

島根県

栗林 光夫

風呂上り浴衣にビール添えてある

青森県

五十嵐 操史

ブライドを捨てると未来が見えてくる

枚方市

久家 代仕男

草津の湯はるる来ぬる旅想つ

西宮市

朝山 千世子

紅茶のむそれらしい話しつつ

島根県

岩田 三和

可もなく不可もなく生きる空しさよ

竹原市

古田 鈍舟

几帳面すぎて他人を遠ざける

羽島市

伊藤 静枝

七夕の伝説孫と涼み台

岸和田市

清野 こう

初盆へ思わぬ人もその数に

大和郡山市

森田 カズエ

凄まじい野性美見せるキタキツネ

和歌山市

内芝 としよ

タンクトップもしも切れたらなと思ひ

岡山県

二宗 吟平

明日開くススキはさかさま筆のよう

岡山市

砂田 静佳

若宮を宿に小鳥の恋みのり

岡山県

二宗 吟平

大阪市 藤森 小雅子

華やかな終幕窓際族と云う

米子市

青戸 美佐

ゆとりなど出来ないままに年をとる

唐津市

山下 勝一

ゲートボールテルテル坊主下げておき

岡山市

花田 たけ志

三味の音が吞め吞め吞めとせき立てる

唐津市

岩崎 実

水風呂を浴びて下着の水洗い

唐津市

田口 虹汀

向日葵に追われて稼ぐ今日も又

羽咋市

三宅 ろ亭

役嫌いどうしてこんなに役にぐる

岡山県

稲岡 正之

床柱負えば重さが身にしみる

羽島市

時田 誠一

人生に立ち止る事のあり過ぎて

岡山市

清水 金太郎

腹割って話せる友も金が無し

兵庫県

中田 白李

定年後叱つてくれる人がない

尾鷲市

渡辺 伊津志

さりげない心遣いが生きて来る

岡山県

岩道 博友

違約金月賦にしたい気で払い

八戸市

島田 昭治

無欲とは聞こえはいいが怠け者

今治市

新居田 胡顔子

朝顔に早起きの徳促され

出雲市

高橋 可保留

約束を渋った帰りの重い足

路郎賞推薦の言葉

西尾 栞

私の、路郎先生の大好きな句に、
二階を降りてどこへ行く身ぞ
という句と

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

の句がある。

第二句は所謂、悟道と諦観を穿った句で、
耽美者が多い。

今回、路郎賞に推した、この句は川柳雑誌から川柳塔へと受け継がれた一種の悟りというようなそして誰もが首領する穿ちの句である。作者は柳歴も五、六年位と思うので、作者を基準とすれば、まだまだ勉強して、作者自身の筋の通った句が確立してからと思っただ、路郎賞という川柳以来の句風によってこの句を推した。作者はまだ年が若く、常に発表される句は、ロマンチックなオセンチな句が多いのであるが、これを機会に川柳の目を大きく開いて欲しい。

次に、新人でも佳い句を作れば、賞に入る励みにとも思っ取えて第一席に推した。

川柳塔常任理事会（9月3日）

第14回路郎賞、第13回川柳塔賞が決まる日である。

各選考委員の顔もやや緊張気味である。それぞれの推薦句を一三夫が別室で清記し、それを主幹に提出する。雅号は伏せてあるが、いずれも佳句ばかりだ。

別室で推薦句一句、準推薦句二句をより抜いた主幹が会議室へ戻ってこられると、一瞬水を打ったように静かになる。

「発表します」

三句のうち最後の一句が推薦句だが、和歌山の新星、松原寿子さんの句がグラン・プリと決まると、場内がざわめき、野村太茂津氏の顔がほころぶ。

川柳塔賞もすんなり決まり、あまり時間もかからず54年度の二賞が決定した。

10月の同人総会で新理事四氏が誕生する。本社への日ごろの貢献度を買われた人々である。

55年6月句会を村田瓢太氏の句集「紅華」の刊行記念となる。（10月4日（木）が常任理事会）

出席―戸田古方・正本水客・黒川紫香・若柳潮花・島居百酒・川村好郎・野村太茂津・橘高薫風・児島与呂志・西尾栞・中島生々庵・板尾岳人・不二田一三夫。

富田林市民川柳大会

日時 昭和54年11月3日（文化の日）

開場 午前10時

締切 午後1時30分

会場 富田林市民会館 大広間

（近鉄南大阪線・喜志駅下車約十分又は富田林市駅下車近鉄バスにて志紀車庫行きに乗車旭ヶ丘下車すぐ）

柳話 川村好郎先生

兼題及び選者 各題 三句吐

「学校」 河野 君子選

「親子」 河内 天笑選

「おもちゃ（玩具）」 菊沢小松園選

「いたずら」 西尾 栞選

「素直」 阿部 柳太選

当日席題 一題発表

各題秀句に楯他多数

会費 五〇〇円

懇親宴 二千円

主催 富田林市・富田林教育委員会
後援 富柳会

往復ハガキ

錦織文子選

人生の復をゆつくり歩きかけ宛消して様に一枚書き忘れ返信のハガキ汚れて帰につき丸にして女それから忙しい肩書きに不満復信欠と書く招待の往復ハガキあて字で来復ばかり溜って居った無精髭無理きいて欲しいと往復ハガキ来る復信はただ〇×でよいハガキ往復ハガキ商魂ちやつかりみせてくる抽選の往復ハガキに托す夢待ち託びた返信ハガキは欠に丸往復ハガキを呉れた求婚者往復ハガキ対話のほしい筆往復ハガキで返事を義務づけるサラ金の督促往復ハガキにし宝くじ往復ハガキに羽根が生え往復ハガキで愛の告白寂しさに孤児は往復ハガキ出す往復ハガキ急用もなし金もなし返事せよ往復ハガキ命令す達者かと往復ハガキに尋ねられ

返事せぬ子だから往復ハガキにし往復ハガキ思つた通りの返事来るヤボ用が往復ハガキ出してから復ハガキ未着へ友の身を案じ省エネへ往復ハガキで待つ返事義理と知る往復ハガキの披露宴マルつけて往復ハガキの義理を足しイエスノー往復ハガキ攻めたてる往復ハガキ出して返事来ぬあせり往復ハガキ要点だけの字を並べ筆不精往復ハガキまで忘れ帰つて来ぬ往復ハガキに今日も暮れ復信へ虫のいいこと詰めてくる待つてゐる往復ハガキに書く厭味出席の〇は大きく書いて出し返信は妻の名前で来るお詫び往復ハガキ皆出席も困るなり往復ハガキ違わねばならぬ人が来ぬ都会の子へ往復葉書も片便り往復ハガキ舌打ちされた返信欄ある指定返信用へふと迷うどちらともとれる往復ハガキ出す二三割往復ハガキ往つたまま抱き合つて往つても復りは独り旅復信のかすが揃つて式近し人幸運の往復ハガキ食いとめる復信のハガキへ不幸の詫びも添え天返信にその人柄が彫つてある

夢酔 素身郎 代仕男 勝美 実男 大柏 佳雲 綾女 博友 花子 無人 里風 虹汀 久仁於 回天子 明朗 春日 早苗 博也 人亭 滝カ子 掬治 虎秋 彩平 凡九郎

川柳塔柳箋

一冊 百五十円
送料 二百円

往復ハガキ待つ身わびしい片便り 軸

秋の空

藤岡花梢選

秋の空日傘のいろも褪せはじめ 昌水
絵心のないわたくしの秋の空 きく子
病室の四角い秋がせきたてる 虎秋
窓際族も見詰める眼にも秋の空 優
秋空へカメラと話すひとり旅 早苗
少年の胸をくすぐる秋の空 七面山
胸一ぱい腹いっぱい秋の空 どんたく
退院の秋空迎えるおらが庭 雀声
熟れた実の一つが秋を深くする 本蔭棒
秋空の青がキャンパスにのつてこず 大柏
その空はまだまだ秋の色でない 春日
とうきびがざわめく空は秋の色 古方
秋空へ日灼けの膚の誇らしく 勝美
カズエ

吟 題 課

燈台が静かに動く秋の空 無人
 屋根うらにへソクリがある秋の空 伊津志
 吐き捨てた愚痴秋空に浮いている ゆう也
 豊作に雀も見上げる秋の空 道子
 秋の空夫婦の諍い続くなり 方大
 秋の空貝になりたい日もあるか 木路
 じいちゃんのスプーンが走る秋の空 魚
 邪心もつ日は仰げない秋の空 右近
 秋空に鬼瓦映える里がえり 越子
 秋の空音痴の父が歌い出す 規不風
 鰯雲秋はこうだと空を塗る 洛醉
 コスモスのかすかに哀し秋の空 満津子
 秋空が人のこころを塗りかえる 代仕男
 コンバインの轟音秋の空を抜け 不二
 朗報の来る秋空の晴れ渡り 軒太楼
 結論の出ぬまま秋の陽がおちり 観洋
 秋の空からだも心も洗われて 静枝

被害地の朝がまぶしい秋の空 佳雲
 新幹線もお城も秋の空を塗る 可住
 父の死へあまりにあまりに天高し 素身郎
 パレットに青がなくなる秋の空 枯梢
 秋の空トロンボ追う子に高すぎる 多賀子

話したい言葉もやめた秋の空 凡九郎

人 地 天
 ネクタイも替えよか秋の空の色 花子
 秋の空碧い雫が落ちそうな 宵明
 すれちがう女に匂う秋の空 軸

原子力

福田丁路選

原子力こわさと期待持ち合せ 昌水
 原子力万能薬になりきれず 七面山
 原子力この電灯もともしてる 雀声
 談判の強気背中に電子力 本蔭棒
 原子炉のあたり色どる赤い花 どんたく
 原子力使途誤って下さるな 春日
 毒の味ついてはなれぬ原子力 古方
 善悪の両刀使う原子力 花子
 原子力食わず嫌いの抱く疑惑 無人
 猛獣を馴らすに似たり原子力 佳雲
 振り上げた拳にあつた原子力 栄
 原爆の街に原子の灯がともり 耕草
 原発が油不足に胸を張り 耕草
 原子力平和を守る武器とする 大
 原子の灯として赤旗振っている 枯梢
 原爆忌墓碑より伸びた草を刈る はじめ
 原子力時代に治らぬ癌があり たもつ
 原子力地球の最後思わせる たもつ
 原子力今はどうでもよい二人 可住
 原子力不安と期待の中で揺れ 御前
 女神だか悪魔か知らぬ原子力 観洋
 原子力いつかは地球食いつぶす

月や星解明させた原子力 綾女
 天地みなこわす力の原子力 回天子
 広島悲劇ぬぐえぬ原子力 素身郎
 原子力使いこなすは人の知恵 勝美
 人間を虫けらにして原子力 宵明
 ヒロシマの怒り原子をたじろかせ カズエ
 原子には無縁になれぬ世に生きる 久仁於
 原発をパスは名所の中に入れ 里風
 原子力他人委せて草むしる 代仕男
 原子力平和利用の名を騙り

佳

神の意に背いて作った原子力 七面山
 わたしにはちんぷんかんの原子力 きよし
 結局は頼るほかなき原子力 登美也
 原子力人間すかんやりそうで 古方
 原子力必要悪の顔をもち 一路

人

仏壇の灯明となる原子力 大柏

地

折鶴の願いに遠くいる原子 枯梢

天

原爆の怖さを綴るペンだこよみ 軸

原子力時代を余所に汽車ポッポ

川柳「ささやま」

三百号記念句集

余分少々あります(二千五百円)
 663-25 兵庫県多紀郡篠山町福住三三四

遠山可住

テレビからヒント天晴れ知能犯
熱戦讀「飯」どころでないテレビ
テレビとは聞くもの老母の針仕事
しょうもないテレビニュースが知恵をつけ

三和
善四郎

やつとこさテレビに妻寝てしまひ
(テレビへ坐ると老妻船を漕ぐ)

同

三台のテレビで家族みな平和
(三台のチャンネル分け合い平和です)

昌水

甲子園テレビの前で汗握る
(テレビ応援ヒットの音へ汗握る)

伊都

子離れの夫婦はテレビの守りばかり
(子ら巣立ちテレビ夫婦となりけり)

八文銭

すねた子が横目でテレビにらんでる
テレビで野球ルールを母おぼえ

同

雅号ぶっちゃけばなし (183)

ほっかい



前山北海

まえやま

川柳に、手を染めたのは、四十
歳の昭和二十年二月、川柳ウイロ
一社の故高沢一浪翁の還暦祝賀を兼ねた句会、
翁の勧めで出席した時、少年時代水泳に親しん
だ新潟市の浜、日本海を懐しみ、雅号を自ら北
海とした。

一浪翁の手ほどきを受け、麻生路郎師に師事
し、昭和十二年不朽洞会同人となった。

戦後三十五年振り渡日、各柳誌に投句したが
帰布後沈滞を続け、二年前金婚式後妻と死別、
八十一歳の再出発を期している。

(母はテレビで野球のルールをおぼえ)
台風情報のテレビはったり消した風
珍客に惜しいテレビの座をはなれ
(珍客にテレビの佳境ちよん切られ)

無人

離婚してからもテレビの人気者
テレビとは知らず電話へ走らされ

慶彦

時事放談のチャンネル権は父のもの
丸味ある言葉はテレビからもらい

同

人生相談テレビと役買うて出る
尋ね人さすがテレビにある威力

同

ナイターの虜で老いのテレビ前
(楽しさはテレビ野球に老い忘れ)

同

頑固爺がテレビドラマへ涙拭き
母はまだ呆けずテレビで見た料理

同

(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

母はまだ呆けずテレビで見た料理
(老母達者テレビ料理に夢中です)

同

ナツメロも飽いたが今の歌もいや
(ナツメロも今歌も飽きテレビ切る)
熱帯夜テレビの音楽まで暑い
(熱帯夜テレビの音も蒸し暑く)

同

夏風邪のおまけ三日のテレビ呆け
(テレビにも飽き夏風邪も去んでくれ)

同

夏の夜のテレビの溪流音たてて
(団扇風テレビの溪流涼を呼ぶ)

同

マルバツの才は鋭いテレビっ子
手内職持ってテレビに遠くいる

同

タレントに豪邸建てさすブラウン管
匙かげんテレビ通りにゆかぬ味

同

浪人を氣遣う音の無いテレビ
チャンネルが全員一致の甲子園

同

チャンネル権真赤な爪に握られて

同

題「証処」10月20日締切(12月号発表)

同

宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四

同

〓七一一 本田恵二朗

同

島居百酒著

同

比島戦線従軍回顧録

同

「白い歯」 好評

同

定価千五百円・送料百六十円

同

発行所 構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

構造社出版株式会社

同

大 萬 川 柳

「刺

激」

入選発表

選 者 川 村 好 郎

投句総数 三百三十一句
入 選 五 十 句

一人旅刺激がほしい夜の灯

和歌山 紀久子
心よい刺激求めて出る句会

子運を連れて歩けば刺激の多い街

大阪 綾 女
多すぎる刺激に堪えている孤独

人妻に刺激が欲しい平和な灯

和歌山 頼 次
も一人の自分が刺激求めてる

老いの身に軽い刺激の生卵

和歌山 佐代子
寒という刺激もあって花開く

お隣りに刺激されてる虚栄心

大阪 美 子
強すぎる刺激に効果が逆になり

刺激追うタフな若さをけなるがり

富田 花 梢
横道の刺激に落とし穴がある

母だけが刺激をうけた懇談日

八尾 夕 花
刺激された日の口紅を濃くぬる

タイトル程ポルノ映画は刺激なく

大阪 柳 志
喪の女に刺激のきついメロドラマ

ほう仙花刺激を受けたとき笑う

平田 代仕男
刺激ない暮し老化に拍車かけ

生き甲斐に刺激求めている若さ

桜井 雀踊子
開病へ刺激にならぬ言葉撰る

仲人は両方刺激して廻り

大阪 ますえ
刺激ない一日老いの無難な日

西宮 喜代子
暴走族刺激の裏にある空虚

守口 右 近
刺激にもなればと祈り吐く苦言

岡山 金太郎
ライバルの窓の灯に刺激され

今治 胡頹子
灼熱の刺激が欲しい倦怠期

倉敷 素身郎
過疎に住みなれてネオンが目につく

倉敷 里 風
新婚が隣の部屋に越して来た

尾鷲 伊津志
若者の胸を躍らすニールック

笠岡 忠 三
強すぎた刺激が理性ぐらつかせ

米子 千代
話題ふと傷のひとつに突きささり

岡山 七面山
大空の青さにいたく刺激され

和泉 洛 醉
久方の出会い刺激の夜に酔う

奈良 本蔭棒
痴漢にも云い分露出ひとすぎる

和歌山 としよ
一言が刺激となった日の励み

和歌山 寿 子
逢えた日の刺激へ汐が満ちてくる

太陽も夏の刺激に酔っている

大阪 勝 美

腹割って話す言葉にある刺激

ライバルの刺激に今日の僕がある

西宮 百 酒

発奮の刺激へ愛の鞭を振る

老らくへせての刺激趣味を持つ

佳 句

大阪 真 砂

刺激などいらぬ夫婦でふむ落葉

交野 テルミ

逢える日の刺激が開くコンバクト

誠意と技術で
世界のために



シャープ株式会社

第26回 八尾市文化祭 市民川柳大会

と き 昭和54年10月28日(日)
正午開場
ところ 八尾市商工会議所
3階大ホール
(近鉄大阪線八尾駅下車南
300m 八尾市役所前)

開会の辞……………深尾 吉則
柳 話「お耳拝借」……………阿部 柳太氏
題及び選者 (順不同)

(席 題)……………和田 恭子氏
「猿」……………保木 寿氏
「並 木」……………伊藤 定子氏
「虫」……………野村太茂津氏
「鍵」……………三井 酔夢氏
「空 氣」……………久保田寿界氏
「躍 動」……………西尾 梨氏

(各題2句吐 締切午後1時30分)

閉会の辞……………土田 欣之
投句先 〒581 (八尾局私書箱第9号)
八尾市清水町1丁目1-6
八尾市立公民館内川柳係
(投句締切 10月9日受付分
まで)

◎ご出席の方は当日受付いたします。

賞 各題最優秀句に八尾市長賞
その他の賞を贈呈する

懇親会 2,000円 (希望者のみ会場で
受付)

主 催 八尾市、八尾市教育委員会

後 援 八尾市立公民館
八尾菜の花句会

若本多久志著

句文集「続・老いの坂」

好評発売中・頒価千円・送料共

序 文 ・ 中 島 生々庵
選 句 ・ 菊 沢 小松園
編 集 ・ 若 本 多久志

本社でお取次ぎいたします。

発行者 若本多久志

尾 鷲 伊津志
札束の刺激は返り血を浴びる

尾 鷲 伊津志
鉛筆は次の刺激を待つて居り

奈 良 本蔭棒
不発弾抱いて刺激を待つ女

人ノ句

橋 本 木 魚

まだ少し刺激が欲しい帯の色

地ノ句

大 阪 小雅子

ウインドの刺激が無言の妻にする

天ノ句

和歌山 幸

埋め火を刺激するの秋の風

選者吟

向い風刺激と受けて突走り

昭和五十四年度

ベストテン(八月現在)

一	百 酒	一六、五	西 宮
二	満 津 子	一六、五	大 阪
三	千 代	一三、〇	米 子
四	寿 子	一一、五	和歌山
五	優 子	一一、五	富田林
六	道 子	一一、五	大 阪
七	小雅子	一一、〇	大 阪
八	柳 志	一一、〇	大 阪

一〇	花 梢	一一、〇	富田林
九	真 砂	一〇、五	大 阪
八	和 子	一〇、五	和歌山
七	美文	一〇、〇	大 阪
六	悠 幸	九、五	八 尾
五	右 近	八、〇	東 予
四	吸 柏	八、〇	守 口
三	夕 花	八、〇	藤井寺
二	あいき	七、五	八 尾
一	祐 祐	七、五	寝屋川

以下略

昭和五十四年度第十一回

「便箋」三句以内

締切 十月二十五日

第十二回(最終回)

「区切り」三句以内
締切 十一月二十五日

投句先

〒593 堺市堀上緑町一ノ三ノ七
藤井一二三万

大萬川柳係

柳界展望

(原稿締切毎月末)

句料七百円・投句先 〒112

文京区千石三の三五の三十一倉寿夫方。

▼寝屋川市文化祭・第三回市民川柳大会は11月4日二時開会で寝屋川市立総合センターで開催。(詳細は本誌十一月号で発表)

▼川柳九月号にイメーシ吟

―西尾葉選、著名柳人作品集に塩満敏作品が出ている。

▼川柳御所柳の八月号は京

番創立50周年記念大会特集

京番大賞「風船を買う

精一ばいの今を買う」家久

真智子

▼高知川柳社創立二十周年

記念作品集募集(雑誌五句)

締切11月末日(投句料不要)

宛先―高知市大川筋一の三

の二五―高知川柳社(選考

に川竹松風氏(本社同人)

も参加)

▼ねぶた七月号に53年度の

「不浪人賞」が発表されて

いる。「占いに出た幸運に

まだ会えず」金枝万作」ほ

か。

▼路郎師句碑建立三十周年

記念・第三一回西日本川柳

大会(九月九日)へ生々庵

句料七百円・投句先 〒112

主幹はじめ本社同人が太華

出席、盛会だった。

▼米沢曉明氏(大田市)か

ら―第23回愛媛夏の川柳大

会の寄せ書拝受、文庫・青

明氏ほか川柳塔関係の雅号

がなつかしい。

▼石原青竜刀(本名秋朗・

筆名巖徹)9月5日老衰の

ため死去。81歳。広島県出

身拓大卒後外務書記生・満

鉄社員・傍ら柳俳両部門の

選者評論等活躍。俳名沙

人。「諷詩人」主宰。「よ

みうり時事川柳」「大法輪

など柳壇を担当。「諷詩電

沙吟」など著書多数。

▼同人の動向△

▼メンズデイリー紙(8月

7日付)の「メンズブプロモ

ーター」に大坂形水氏が紹

介され、句集「谷町」刊行

のことにふれてゐる。

▼浜野奇童氏(岡山県)か

ら―このたび弓削川柳社が

岡山県三木記念助成会の受

賞団体として推挙され、三

木記念ホールで受賞しまし

た。九月九日の西日本川柳

大会も、この記念大会とし

受賞のようこびを全国柳人

ショッピング・ゾーン

梅田
一番地

楽しいショッピグと
くらしにくるの
いこいをつくるの
皆さまで
百貨店



大阪梅田・水端定休

阪神

☎(06)346-1201(代)

にわかちたいと思っていま

す。

▼尼緑之助氏(出雲市)は

最近路上で転ばれ肋骨二本

と左母指骨折で通院されて

いる。右手が利くので書き

ものには不自由ではないと

のこと。ご金快の一日も早

いことを祈ります。

▼多久志氏の「続・老いの

坂」を読んだ。わかやま

の幸・武雄・としよ・三男

諸氏が筆をそろえて讃えて

いる。

▼村田瓢太氏(守口市)は

川柳生活二十五周年を記念

して、句集「紅華」を発刊

されることになり、一応瓢

太氏の自選で三百句ほど抜

かれたが、もう二、三百句

ほしいので目下編集部の一

三夫氏が選句中。今年中に

句集は出来るが、55年6月

6日の本社句会で刊行記念

が予定されている。

▼市場没食子・カネ女ご夫

妻は三百六十余頁という重

量感にあふれる「夫婦」の

出来ばえをよるこばれ九月

初旬、生々庵・小石ご夫妻

や編集部の一三夫氏にお礼

に來社された。なお同氏は

来年三月六日の刊行記念句会を盛大にしてもらうため句集はそれまで温めておきたいとのこと。(地方でご希望の方は〒579東大阪市六万寺町三の九の二六市場没食子方へお申込みください。送料共で千円です)▼岸南柳一周忌句会が九月十七日、理容「男まえ」で開催。菊沢小松園氏が兼題「若い頃」の選をされた。かつては南柳翁から「ほんばん」とよばれたとか。▼河内天笑氏(堺市)から「阿波おどり川柳大会(本誌参照)は大成功で、来年

は新大阪新聞社の協賛で「桜まつり」を予定しています。それから同社発行の月刊経済誌「N・D・O」に川柳欄が55年新春号から創設、この選者には橋高薫風氏の予定です。▼小林由多香氏(鳥取市)から「第三回茗人忌川柳大会はおかげで大盛会でした。お礼申しあげます。」日本海新聞から本社関係の入選者は総合優勝「浦野和子」②岩本雀踊子③八木千代。茗人賞は両川洋々・八木千代諸氏。▼津田与史氏(和歌山市)

新同人紹介

竹内秋峰

松浦大鷹

上田翠光

生々庵・栗推薦

は腸閉塞手術で八月末入院された。ご全快の一日も早かれと祈ります。

▼垂井千寿子さん(和歌山市)に女兒のお孫さんが出来た。おめでとつ。

▽10月の句会△

▼堺川柳会は十二日六時から八木摩天郎居で開催。題は「からだ／月／ピクニック」。

▼南海川柳部十八日六時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は「曲がり角／無気力／詰め込み」。

▼南大阪川柳会は二十日六時から松崎町三丁目大萬で開催。題は「態度／共稼ぎ／沈む／筆ペン」。

森田茗人遺句集

「風のいと」 定価 千五百円

河村日満氏「川柳の鬼森田茗人君を知る人も知らぬ人も、川柳を志す人は是非この一冊を。」

発行所 〒680鳥取市相生町三丁目二〇四

森田方うみなり川柳会

責任者 小林由多香

市場没食子・市場カネ女共著

傘寿・金婚『夫婦』堂々発刊

序文 中島生々庵
題字 中島小石
装画 市場カネ女
編集 不二田一三夫
昭和55年3月7日(金)
夫婦・刊行記念句会 会場 金属会館

柳謝話

兼選題 「夫婦」 中島生々庵
「傘」 市場没食子
「針」 若柳潮花選
「薬」 大坂形水選
菊沢小松園選

席題 一題・当日発表・各題三句以内
費 千円(句集呈)

主催 川柳塔社

★個性を尊重する路郎選に挑み四十年間の成果をここに集めて「夫婦」を刊行。没食子川柳とは?全盛期の路郎選とは?

花束贈呈の
藤岡花梢さん



川柳忌ならびに

「麻生路郎」 橘高薫風編

刊行記念句会

9月7日・会場 金属会館

まず司会の柳宏子さんから、せんば主幹、岡橋宣介氏の急逝が告げられる。このあと路郎先生と宣介氏の対談がテープによって流されるので、とくに柳宏子さんが宣介氏の死にふれられたのであろう。

篠山の小西無鬼氏も元氣なお顔を見せてくださった。(川柳塔篠山支部「ささやま」の会員句集が出た。本誌参照)

まず生々庵主幹が登壇。

ご挨拶

中島生々庵

構造社出版、橘高薫風編の川柳全集「麻生路郎」発刊記念をサブタイトルとして、本月の本社定例会を開きましたところ、お暑期中を多数ご参会頂きました事を、有り難く御礼申し上げます。

先月の路郎忌に際してのご挨拶にも申し上げましたが、麻生路郎、岸本水府、川上三太郎、楊元紋太、西田当百、等々の大先輩諸先生方が、だんだん歴史上の人物化してゆく事は、どうともならぬ時の流れかも知れません。

が、とすると、先生方のお姿を日を追うて、瞼の中から見失う日が多くなつて参りまして大変申しわけない事だと、自らを戒めて居る次第であります。

こうした折に、構造社から川柳全集なるものを出版され、現代川柳再興の諸先生方の作品なり、人物像なり、略歴なりを私達後進の者に提供してくれた事は、私達にとって一大警鐘とも、或は燈台のレンズを磨きなおされたとも感じるのであります。出版企画に際して構造社から川柳塔に対し、「麻生路郎」の編集方依頼の連絡がありました。川柳塔社常任理事会は何のためらいもなく、満場一致をもって編集長、橘高薫風を煩わすことに決したのであります。薫風が「あとがき」に書いて居るように、「引き上げた時、これは大変な仕事だ」だったのである。さぞかし言葉に絶するご苦労の多かったことと、関係者一同感謝して居ります。しかし今日出来上がったこの本を掌にうけとって拝見致しますと、今更の如く、達意麗筆、薫風ならではの感深く、

川柳全集②「麻生路郎」橘高薫風編・刊行記念句会とあって、他社の方々もお祝いに駆けつけてくださる。

薫風さんの机の前の「麻生路郎」がみるみるうちに本の山が崩れていく。発売いらい快調である。

読みはじめると知らず知らず最後まで一気に読み続ける程の魅力、これは読んだ人のすべてが口を揃えて感嘆するのでもわかります。これは一つに薫風が路郎先生を憶う切々たる情感がかくあらしめたものと確信するものがあります。内容をご覧になったらわかります



「薫風さんようやった」と
各方面の評判もよい

通り、よくもこれ程の資料を集めたもの、而もその山のような資料を手際よく整理して四六〇頁に収め、出版社の意向に添うていること等も、驚きの外はないのであるが、長年先生のご身辺に親しく仕え、川柳の事は勿論、川柳以前の人間としてあるべき姿を直接ご指導賜ったわれ等老人組にとつては、うたた感慨を禁じ得ないものばかりであります。中には私の老骨に全く初耳という事柄もありまして、先生を偲ぶべきさとしては、他に類例のない傑作書とも言うべく、その点、この席をかりまして改めて薫風さんに厚くお礼を申し上げ、併せて企画発刊された構造社に対しても深厚なる感謝の意を表する次第であります。どうぞ皆様も、ありし日の路郎先生のお姿を脳中に蘇らせ、路郎先生の現代川柳に対する正しい情熱を肌でうけとめて頂きます様、この「麻生路郎」をご愛読下さいますことをおすすしめして、本日の発刊記念句会のご挨拶と致します。

お話がおわると、路郎先生と宣介氏の対談のテープがマイクにのる。内容は霞乃先生の句集「福寿草」の序文（路郎先生筆）のことだが、惜しいことに聞きとりにくく、中途で断念せざるを得なかった。このテープは宣介氏宅へ路郎先生が立ち寄られたとき、宣介氏が隠しマイクで収録されたもの（この一巻を柳宏子さんがいただいたそうである。）

ここで薫風さんに花束贈呈というプログラムになる。富田林の藤岡花梢さんである。富

柳会というより大萬川柳の女主的存在である花梢さんから薫風さんの手に花束がわたされるところとトツと場内から拍手がとどろく。

つぎは川柳塔社常任理事からの記念品贈呈である。岳人さんの企画だが、まず菜の花句会の宮西弥生さんが「だるま」を、本年度の路郎賞作家、わかやま吟社の松原寿子さんが「ベルト」を、そして本社の小谷葉子さんが「傘」をそれぞれ薫風さんに贈る。拍手、拍手の連続だ。

薫風さんはこれまでに三句集を出しているが今日が最高ではなかったか。

裏はなしになるが、岳人さんに「記念品は何にきまつたか」とたずねると、「わからない」と云う。こちらも記事をとる以上、記念品がわからないでは困るが、弥生さんと小出智子さんと高橋夕花さんにそれぞれ記念品購入を依頼したのだそうだった。

「だるま」「ベルト」「傘」の三題はなしをスペースがあれば書いてみたかった。

これらのプログラムがすむと、いよいよ披露に移る。

薫風さんの出版記念とあって、各選者もひとしお熱がこもる。

今日のMVPは東大阪川柳同好会の新鋭・那須好石（鎮彦改め）さんが獲得。改号祝いに月間賞杯が輝く。

受付・児島与呂志・金井文秋・塩満 敏

進行・西田柳宏子・記録 高杉鬼遊

カメラ・板尾岳人・塩満 敏

婦唱夫随でゆくり進む老の坂
この道を進むと私に会えそうて
一步後退二歩前進の策を立て
カタツムリの進歩をしかり子に見せる
進化したゴリラ耳たぶ動っている
雑兵の進むよりない労働歌
妻の持つ時計はいつも進んでる
減量をしたい身体へ食進む
進め進め妻のラッパがせきたてる
退くことを知らぬ盲進あぶながり
前進に酔うてモラルの勇み足
筋書の通りに進む恋である
合理化が進む見事な人嫌い
明日はどうあろうと今日を勝ち進む
子の進む方へ寄り添う影法師
進軍ラッパ鳴らしつづけた立志伝
ハンケチの白さ話が進まない
赤ちゃんも思惑あって這い進む
捨て石の一つだけ進んだことにする
他人さんが進みましたないうてくれ
咲く花に進軍ラッパなどいらぬ
進んでる女が話さない鑑
前進のかけへ付き深く胃の薬
昇進をすると孤独が添くなる
自己主張進んで椅子が固くなる
進むことだけしか知らぬ阿呆がいる
前進へ一本の薬はなさない
文化進む中に滅びの詩がある

兼題「時計」

板尾岳人選

夕花 夕花 夕花 夕花 夕花 夕花 夕花 夕花 夕花 夕花
滋雀 庸佑 英壬子 憲祐 形水 千代三 あいき 好郎 憲祐 醉々 喜代志 幸生 智子 瓢太 栗 千万子 水客 古方 一三夫 英壬子 憲祐 みずほ 水客 潮花 寿子 綾女 蘭

腕時計巻いて時刻は気にしない
正直な時計を妻は気にいらぬ
窓きわで時計ばかりを覗いてる
時計だけ素直なような気のする日
十二時にきっちり逢えた花時計
時計五分進めて五分寝るつもり
進みがちな時計を持っている社長
豆腐屋を時計代りに老夫婦
時のたつ早さ時計の知らぬこと
アリバイをつぶさに知っている時計
腹時計今日は四回食べました
日時計の強味太陽ある限り
テレビ見て我が家の時計信じない
平家部落で優雅な時を打つ時計
人生の坐折時計の知らぬこと
ネジ一杯巻いて夫のかえり待つ
時計だけ呼吸していた裸死体
悲しみの事故を知ってる腕時計
冬の陽の人を振向く花時計
応接の時計は今日進みがち
小便小僧に腕時計嵌めてやろ
時計より妻より約手に起される
散髪屋しよつちゅう時計覗かれる
時計でも怒れば左回ります
時計には責任のない乗り遅れ
しかりと動く丈夫な時計買う
古風だが明治維新をみた時計
帰りたくない腕に時計が巻いてある
不意打へ時計の針が直立す
ローレックスはめてるさかい貸してくれ
真夜中の一人時計のリズム読む

百酒 夕花 百酒 幸太郎 春巳 形水 生々庵 柳宏子 智子 一三夫 喜風 トメ子 醉々 英子 花梢 登美也 清女 花梢 規風 好郎 鬼遊 枯梢 比呂志 好石 敏 夕花 君子 洋敏 英子


ATLAS
プロス
 高級洋菓子・レストラン
 堺市役所前
 TEL (21) 2334

時限爆弾時をきざんでいる世界
逢う時の時計暫く止めておく
よく狂う柱時計で親しまれ
ライバルも昼にめし食う時計もつ
正確な時計だそうで針がない
脈搏を柱時計で数えてる
がむしやらな男に時計合わせられる
火葬場もサマータイムに合わせる
目覚時計ひねくつたら動き出し
ロンジンもオメガも飽いてきた虚栄
静止した時計が過去を連れ戻す
そむかれてそれから時計のない世界
ひねくれた時計よ昨日へ廻るべし
割り込みが来てから時計の針狂う
妻の留守男は時計恐くなる
殿様の頃の時計は午で食べ

雀踊子 あいき 形水 憲祐 喜代志 トメ子 好石 武水 静馬 千代三 寿子 弥生 幸生 弥生 邦晴

ネジのある限りノルマと言う振子
戦死した父の時計がまだ動く
腹時計めしどき告げぬ二日酔
駅前の時計が正確だと思ひ
進み勝ちになる少年の腹時計
デザイナーある日時計を逆巻き
エリートが持つ秒針のない時計
他人行儀に五分進めである時計
明け方の時計に罪を裁かれる
決闘が終り時計が動き出す
打明けてからの時計に音がある
早熟な時計が狂うと冬になる
時計屋の時計は人をよく騙す

兼題「炎」

高杉鬼遊選

滋 雀 一三天 静 馬 早 苗 文 秋 英 千子 百 酒 藻 介 寿 子 史 好 君 子 夕 花 鬼 遊 枯 梢 春 江 幸 馬 頂 留 子 英 子 白 兔 み ず ほ 喜 代 志 潮 花 憲 祐 優 栗 清 女 武 水 醉 々 幸 生

天中殺白い炎を抱くおんな
土門拳作品Aにある炎
宝石を見ると炎を吐く女
バラ活けてバラの炎に敗けている
御舟描く炎は白い蝶が舞い
一晚経つと消えてしまつていた炎
炎の街でひじきを食わす店
手鍋さげてもいとわな炎
週刊誌の広告炎とは違ひ
鍵かけて女の日記炎に違ひ
向日葵を画くと炎の人になる
眼の奥のはむらを見られまいとする
ランラン死す炎をくぐり抜けられず
悲恋とはまんじ巴になる炎
ゴールインまでは確かに炎に
八起き目の男炎の中に入る
本を積む無口な父の炎みる
煙突の途中で哭いている炎
瘦身のどこに潜んでいる炎
紫の炎の方が怖わそうで
戦友を焼いた炎に蛾も狂う

兼題「一ト筋」

橋高薫風選

一三天 岳 人 一三天 桐 下 栗 智 子 寿 界 恒 明 藻 介 千 万 子 み ず ほ 水 客 藻 介 紫 香 君 子 弥 生 夕 花 喜 代 志 形 水 古 方 鬼 遊 好 石 智 子 万 里 喜 風 洋 敏 千 代 三 幸 涼 一 英 子

生涯を豆腐屋という朝を起き
一ト筋に生きて美田を残さない
一ト筋に亡夫暮うて老けてゆく
一ト筋の水が流れて人が住み
一ト筋の煙が谷を深くする
一ト筋を信じて蜘蛛が降りてくる
一ト筋に子育て終えた日の空虚
一ト筋の愛を小出しにする女
ひとすじの涙に夫婦幕は閉じ
一ト筋の涙を患者見逃がさず
一ト筋縄でいかぬ男と手をつなぐ
一ト筋の流があるから祭られる
水芭蕉の沼へ一ト筋板の道
ひとすじに貯めて老嬢淋しがり
愛一筋女はめくらになつてゆく
一ト筋の母の涙に縛られる
一ト筋に雄獅子の如く狂うべし
一ト筋に来た芸界の裏表
一ト筋に泣いて笑って寄席囃子
棺一ト筋の家に育つてペンで食う
一ト筋の糸で天迄届く風
一ト筋に折る両掌が美しい
一ト筋に仕えた妻に悔いがある
一枚の辞令が一ト筋の道変る
たくらみへ一ト筋下駄がちびただけ
一ト筋の道が人間臭うなり
女のさが一ト筋の髪おののかず
一ト筋に思ひつめると蛇になる
一ト筋に生きた道にも廻り道
一ト筋に生きる豊かな眼に出合い
一ト筋のころを終戦日に思ふ

鬼 遊 花 梢 あいき 小松園 史 好 夕 花 千 万 子 柳 伸 雅 風 洋 敏 水 客 紫 香 英 千子 静 馬 としよ 君 子 形 水 岳 人 武 水 右 近 滋 雀 夕 花 春 江 栗 紫 香 生 々庵 一三天 好 石 薫 風



岡橋宣介さんを悼む

西田 柳宏子

せんば川柳社の宣介さんが亡くなられた。謹んで御冥福をお祈りします。(敢えて大先輩をサン付けて呼ばせて頂きます。)

同じ町会にいた関係で私が川柳を始める以前の終戦後から存じ上げていた。寧ろ昭和24年頃から山羊を飼って、菜園やら草花作りによく働く奥様を知っていたが特に親しくなったのは昭和33年岡橋さんの愛犬秋田種血統書付の仔犬を買った御縁からである。その頃清水白柳さんに川柳を教えて頂いて間もない私は宣介さんの名前は聞き知っていたが、矢張り仔犬の里親の親しさが優先していた。

川柳の「せんば」俳句の「琥珀」の小さな木札がかかっていた。犬を離れて川柳でのお交際は残念乍ら想い出せない。せんばの句会にも尼崎の記念句会を除いて出席したことがないのも申訳ないと思います。寧ろ48年1月軽い脳出血で倒れ闘病生活に入られてから、句会の帰途立寄って話をしたり、宣介さんの川柳観的なものや、酷しい句評を聞かせて頂いた。52年頃まではそれでも奥さんに付添

われて各方面の記念句会や大会に出席して居られたお姿を見受けたが、一分の隙もなく、頭はビツリと分け、時には少し派手だがセンスのよいスーツ、川柳紳士のナンバーワン的なおしゃれ振りと、頑固で口の悪い彦左衛門的な存在はよく知られている。辛喇な句評は柳壇各社のへだてなく、せんば同人にも容赦なく、特に前衛的句風に対しては、理解ある反面特に手酷しい批判をもっていたようであるが、このことは私より寧ろせんば或は先輩で先輩諸氏が語られると思う。

リハビリテーションで杖を片手に、片手を奥さんに執られて近所を散歩の途中私の家の処で小休止しているような時でも決して身だしなみはくずしていません。53年1月から寝たきり状態になり、偶に立寄ると大変喜んで話を聞いて下さったものである。

53年夏頃からロレッツが怪しくなりよく苦笑して居られたが反骨精神は衰えていなかった。今年の七月夏風邪がもとでお腹をこわし四

十度の熱が三日も続いてから急激に弱り、時には奥さんすら判らない時があった。八月四日突然奥さんに「御馳走おきに」とおぼつかない口調でお礼を言ったそうである。八月十二日私が寄り添った時は果して柳宏子と判ったかどうか……握った掌の反応も弱々しかった。八月十四日から意識不明になり八月十九日午後五時十分静かに、静かに永眠されたのである。……老衰……享年八十三歳。

只一つ心遣りは近く出版される宣介さんの句集「熊野」を見て貰えなかったことであろう。出身地熊野地方を句集につけ心から待っていたそうである。

葬儀の時の宣介さんの写真は型破りの破顔一笑の明るい写真だった。葬儀にそぐわないように思えたこの写真が、葬儀の二日後にお伺いして奥様に色々お聞きしている時、恰も横で笑い乍ら一緒に話しているような錯覚を起させる実に嬉しい写真なのに心打たれた。いつまでも、いつまでも奥さんの傍で笑顔

を絶やさず見守ってあげて下さい。

宣介さんの御冥福を今一度念じます。合掌

芳柳院釈留願……何とおしやれて頑固な

宣介さんらしい法名

因みに本名留蔵(明・30・4・20・生)

本職特許事務所(弁理士)

▼告別式(8月21日)は自宅で営まれた。本社からは小松園・摩天郎・薫風・柳宏子諸氏ほか参列。

老地神壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

どんぐり川柳会

谷垣

マネキンの膳のはこりは夏にとる
肖像画の顔にくつきり悪事浮く
も一つつの顔へ頭を下げにくる
代議士は顔貸し料はちゃんと取り
様々なおへそが紫外線を浴び
黙ってる顔は賢いように見え
行先きは鰻に聞けという政治
広い顔持つと悪友多くなる
置物にされると壺に顔がある
そここに顔出す資産がきたらし
顔を売るために手段を選ばない
マルクスに夢中 右側の眼が見えぬ
ひさしぶりに夢がそろうと酌む話
無我夢中生きた証しの子等集立ち
あの人のおへそはきつと美しい
さし上げて小さな足を顔に受け
顔立ててくれとは既に負けている
十四になると鰻も修羅になる
遠い日の日記に夢中の恋があり
顔つくる男欲しさの顔つくる

史好報

岳人 英壬子 吸江 瓢砂 真砂 鬼遊 酔々 鎮彦 弥生 雅風 勝美 憲祐 万里 吐里 千代三 サヨ 好郎 薫風 修史 小松園

オースケ川柳会

大坂

形水報

暫らくは馬鹿になる気で幹事役
来客の子供割箸わって待ち
商売の旨さはバカになっておく
怪我だけで済んで安堵のオートバイ
ゴキブリの命割箸でつまんでる
割箸も洗って残す律儀者
ハイキングたけたわらびも持ち帰り
人目馬鹿妻の背流す旅の空
怪我が出てから工事始めてる
赤チンで良かった孫の向う脛
馬鹿野郎陰で新入生となってる
馬鹿なりに自分のルールは持っている
割箸と同じ運命の日雇夫
馬鹿なりに一本筋は通してる
血だらけになっても夢はまだ醒めず
薬箱かくして子供手当する
怪我舐める野犬となつて強く生き
人間の馬鹿水爆をもて余し
北浜で今なら軽い怪我ですむ
魚眼レンズで撮ったアップの顔が馬鹿
忘れたい怪我を世間はまた覚え
川柳化粧槽 植村客遊子報

千夢 信楽 光男 一念 幸栄 岳麓 秀川 亜也子 舟影 博泉 雅洋 野生 亜成 一扇 聖地 度 形水 入仙 好郎 岳詩 秋月 実男 奮水 越山 紅葉 永葉 永楽

先生と書いて本心のぞかせず
川柳たけはら

客遊子

天下泰平男やもめを君知るや
六十の坂はどちらも甘えたし
金の鈴鳴らして行くか宮詣り
中学生だからすみまで読む新聞
さどかりの旅はてしなき影法師
やどかりは家をせおって歩くんだ
風薫る指輪にしたいサクランポ
私に本音はかしたおぼろ月
頂上に佇てはむなしいかも知れぬ
ゴム消しとさしてすてきなすべり台
かげろうのつと青春の横切れり
由来なき石仏にある安らぎよ
初孫の仕草一日見てあきす
結び目の固さに母の愛がある
以下余白そんな人生だつてあり
肩書があつさり兜を脱がさない
潮騒の心五線譜には書けぬ
姑と嫁のきすなをしかと子が見てる
ブル攻めで来ようが退くな丸木橋
妻のエプロンに妻の匂いは白である
歳月の早さへ指を折る五月
菜の花句会 高杉

鬼遊報 勝美 雀踊子 度 頂留子 みずは 榎左子 鬼遊 静水 房幸 蘭 中一愛 小直美 三笑子 寛子 菁居 小四紀 鈍舟 不朽 秀夫 鬼焼 節緑 松路 敬子 英詩 かつこ かつ子

墓場まで抱いて行く名は唯一つ
豊満なバストで人工哺育する

ご先祖の墓は金比羅さんと差し向い
翔んで翔んで女雲から降りて来す

真夜中の墓だんだんと賑やかに
節高の手で出稼ぎは土産買う

あの人の墓と向きあうように建て
雲一つ動き決心したベンチ

海に向く墓には海女の名を誌す
群れ組めば野良犬にさえる節度

再婚を納得させる墓参り
その時の気分を決める雲の顔

ご先祖は窮屈な墓蟬時雨
いずも川柳会

去年の垢落として富士の山開き
築庭のバックは他人の山を借り

スタミナをつけてと妻に飼育され
千秋の憶い届かぬ遠花火

省エネに出番が近い閉じた山
墓掃除蟬も一緒に声かける

スタミナが切れて巻かれぬネジと知る
玉音を聞いたあの日の蟬しぐれ

過ぎたるは及ばず鯉食つて下痢
アベックにあきれた蟬が枝を変え

山の雨手持無沙汰に耐えている
先代の庭園不幸が埋めてある

千円の重み知つて時間給
生い茂る山は治水の雨を抱く

糸葉

綾女

弥生

岳人

昭子

小松園

柳伸

醉々

幸生

秋花

果美

草丘

虎秋

草丘

一族が女の園となる家系
花園で蝶の不覚は眠くなり

川柳塔まつえ句会
恒松

優しさも男らしさも亡夫に似て
性格の不一致ロマンの馴れの果て

性格がそれぞれ違う子に育ち
根分けした苗が隣も咲き揃い

新築の隣にわが家小さく見え
上役の性格をつぐ宮仕え

気心を互いにさぐる初対面
寄付金へ隣は隣と割切つて

隣とは選挙以来の仲たがい
タレントに性格のもつれまで学び

自信ない線へ定規が笑ひそう
定規から外れ立ち退き免がれる

川柳ささやま
河原みのる報

樹令三〇〇年増家が誇る寺の庭
三〇〇年の家伝今尚生き続け

三〇〇万ダイヤの指輪夢で買い
墓詣り里の空気を背を伸ばし

負傷した指も伸よく爪が伸び
伸びなんと欲する虫はまず縮み

山林の記念碑名前に葛が巻き
記念にとマユミを買つて虫がつき

記念樹へ一鍬盛つて巣立ちする
寿と書く日の妻の忙しき

秀子

緑之助

町紅報

伊都

寿美子

愚童

虎秋

美佐

静江

登美也

鶴丸

みのも

新雪

舞吉

倉吉打吹川柳会

木の高さ見上げ木の根の深さ知る
恩愛の深さは親の死後に知り

人情の深さは過疎の人にふれ
亡母に逢う深い眠りの中で逢う

悲しみの深き喪服の袖に洩れ
十字架に罪の深さを懺悔する

愛情の深さ信じてぬる膝
逆境に夫婦の仲が深められ

深々とさげる頭も選挙まで
苦労して分つた母の深い愛

嫉妬深い女が又も爪を研ぐ
失敗をしたから用心深くなり

判一つ深い友情駄目にする
背信の責めの深さに命断ち

ふところの深さに触れる人に逢い
佳句地10選

父の日も代役のない朝の靴
今の内ですネ親子のシャボン玉

ずつしりと心に重い喪服着る
使い捨てのオシメを抱いた赤い爪

未来から醒めた男の朝のかお
一言が過ぎた分だけ狭くなる

植えられた鉢で生命を失くす
腹巻の金を知つて今日の汗

石庭へ凡夫悟つた顔で座す
政治家の舌は釘抜きで抜けぬ

弘朗報

布堂

里誦

夕路

日満

独歩

おさむ

舍人

弘生

雄々

みほの

御前

みやび

みず江

ふかい仲二人に春雨遠慮せぬ
政界の深い疑惑の底知れず
情実にはだされ深入りしてしま
い
それに深い仲とは露知らず

東大阪川柳同好会

齊藤三十四報

政治へのストレス一句ぶつつける

愛される女にも似た鮎姿

メモが来るお色直しが出来たら

裁かれる法の重さになったメモ

一枚のメモ黒幕を眠らせず

生活のゆとり中年詩が好き

古戦場今はハイツと言う団地

メモ帖の私の秘密見せられぬ

快よい旅ストレスを吹きとばす

古戦場鉄砲百合がしやべりだす

中年でやつと課長の椅子もらい

ストレスが溜り赤鬼青くなる

ストレスが蓄って豚がやせてくる

一枚のメモに或る日を主張さす

ストレスも酒ですむなら知れている

墓穴掘るメモとは神も気がつかず

バスボート父(岡山)へ泣きに立つ

川柳後楽(岡山市) 井上柳五郎報

よろめきの深さを讀んだ袖の下

よろめきを靴音で知る妻の勘

良心がよろめきかけたのを戻し

よろめきの終点三面記事になり

優勝へ手ごころせず打ちまくり

手ごころの視線が何かを言いたげに

観 洋
寿 朗
軒 太
弘 朗

千代子

弥山人

鎮 彦

雀 踊

湖 風

喜 風

かずを

益 孝

綾 女

良 京

度

誓 二

醉 々

文 秋

凡 九

勝 美

柳 伸

信 治

恒 洋

昌 吾

哲 郎

胡 風

住 治

たけ志

手ごころにきびしい父の老いを知る
手ごころが欲しい相手の目を感じ
生卵日銭を稼ぐ精をつけ
葉の裏で虫の卵は出番待つ
隠し芸卵を立たす妙技見せ
二十四の瞳に光る小豆島
男なら怒れと妻が涙ぐみ
一億の涙が漏れた日が巡り

城山川柳会

川口

結局は帯に短い人と添い

ハイと云う短い返事がむつかしい

久し振りに来た子の便り短かすぎ

短気ももう短所ではない夫婦仲

バツと咲きバツと散るから美しい

短大をもつ氣にしない社会人

長距離の電話短く返事すみ

ビヤガーデン星はまたたく間に流れ

ゴキブリのいのち短かし紙の家

孫の指眉間の皺を消しに来る

初恋もあつたかなあと皺撫でる

老夫婦互の皺を労りぬ

手の甲の皺にもじつと過去をみる

寝敷してちよっぴり明日の幸を待ち

苦勞した額の皺は母の愛

孫抱いて笑った顔に皺深む

名優も寄る皺かくす厚化粧

他人から見れば短くない一生

言い負けた日に抜く白髪三三本

孝心へ母の白髪が語りかけ

南大阪川柳会

中川

少年の小指に少しある忘却

柳五郎
久米雄
博 友
ひろし
元 一
梁 太
宏 太
秋 月

弘生報

右 近

英王

ふ み

人 美

とし

秀 村

なり

一 休

テル

満津

きく

ハル

喜代

ます

喜 斎

星 洗

千 子

道 子

弘 生

岳 人

忘却に悩んだ頃もやせていず
忘却へ灰の深さにあるぬくみ
忘却の木蔭に消える落ち椿
渡り鳥の羽に旋盤工が居る
編機より手あみで愛をはずませる
次々と同じ間違える機械
ばやらずに天の裁量待つとする
ばやしても総理に届く距離でない
夫婦してばやいて金になる舞台
ぎりぎりの下着青春あふれる
もう一寸で軽犯罪になる下着
聖書抱く日の下着は白にする
下着まで洗ってあげる人が居る
細くなるための下着を買いにゆく
人間の弱さを持っていたホープ
転動で腕ためされてるホープ
OKして自分に腹を立てている
OKの目を閉じている待っている
OKOK八方美人で生きてます

三井ケ丘川柳会

高田

台風の進路に母がひとり住む

売れぬ前の落語家めし屋でよく出会う

日の丸で日本の格好つけている

絵日記の為に田舎へ暮まいり

台風が秋を引き連れ北へ去る

行きすりの柵へ遍路笠を取る

契約金だけはレギュラークラスなり

先輩の背に根性を教えられ

契約に待ったをかける噂聞く

教えない非行の道へ子は走り

片言の子が若いママに知恵つける

柳 伸
勝 美
鬼 遊
醉 々
久 子
弘 生
英 祐
千 代
千 三
恒 明
静 香
あいき
智 子
雀 踊
文 秋
君 子
滋 雀
凡 九
博 泉
恒 明
水 声
勝 美
隆 茶
洋 風
晴 風
よし
光 夫
野 生
てまり
琴 音

教えたことが引金採めるだけ採める
 粗忽にも契約をした判が泣き
 根性に負けたと契約印を押し
 ボロロンと涙へ溺れそうになる
 団体と言う名目でさき出す
 神様に白紙委任の契約書
 はんこ押すまでは仏の顔をする
 めくばせで教えるのに鈍い感
 写経してみどりの風を聞いている
 教えても時代の違いを子が笑う
 エゴとエゴ神より核がたよられる
 自分の足音ささいやになる日もありて
 料亭の灯で契約の印を押し
 雑種だが教えただけの芸はする
 川柳大阪 児島与呂志報

一 念 重也子 三 郎 垂 成 博 泉 弘 生 度 英王子 静 歩 あいき 吉 則 萬 的 潮 花 薰 風 九 平 洛 醉 敏 喜 醉 德 松 大 也 本 蔭 棒 吉 峰 真 佐 志 天 樹 清 比 呂 志 道 子 眉 水 秀 峰 胡 蝶

苦勞人豊かな知恵の泉持ち
 御堂筋緑美しく梅雨の入り
 今日だけの喜び信じている暮し
 南海電鉄川柳部(大阪市)辻 圭水報
 駅ビルでも待たしビヤでもおさら
 駅ビルのビヤガーデンが初夏になり
 駅ビルへ又店を持つ借り上手
 駅ビルの売上げ赤字埋めてくれ
 駅ビルの改築一寸まこつかせ
 駅ビルになって電車は余計こみ
 駅ビルが出来て陽気な義母になり
 沿線案内の垂れ幕長しナンパ駅
 駅ビルの騒音絶えてただのビル
 不景氣をどこ吹く風と駅のビル
 駅ビルの立喰いうどんおいしそう
 駅ビルは食事に不自由ない近所
 駅ビルに傍系のかい百貨店
 駅ビルで飛行機切符の店も出し
 生命保険の会社もあります駅のビル
 売上げにびびく駅ビルオープンし
 和歌山七面句会 中筋 三幸報
 右もアベック左もアベック公園を行く
 古本屋ひよつと見つかる面白さ
 公園は四季をおりなす人模様
 柳蔭の公衆電話に恋がある
 老夫婦ベンチに腰かけ夕涼み
 奥女中化けて出そうに柳垂れ
 原爆忌柳はだまて揺れている
 ショッピングから公園の朝が来る
 古着市外人客の方に売れ
 町筋は文化財なら夏柳
 希久志 君 枝 与 呂 志 圭 水 報 摩 天 郎 小 松 園 宏 子 綾 女 勝 美 主 水 柳 伸 与 一 維 久 子 東 雲 川 狂 子 誓 二 雅 風 美 乙 女 恒 明 光 三 幸 報 三 幸 報 光 三 郎 昌 治 五 穂 幸 千 秋 朱 三 子 わ か 智 水 庵 晶 子 周 穂

第十三回東大阪市文化祭参加

第七回 川柳大会

日時 昭和五十四年十月十日(祭日)
正午開場 出句〆切一時半

会場 東大阪市立中央公民館二階
視聴覚教室 近鉄水和駅南

柳話 「川柳雑記帳」
川柳塔副理事長 橋高 薫 風氏

兼題及び選者

「想像」 神谷凡九郎 選

「街」 米沢としを 選

「無駄」 篠内千代子 選

「運命」 志水浩一郎 選

「毒」 菊沢小松園 選

「ころ」 岩井 三窓 選

「裁く」 西尾 栗 選

「一題」 当日発表 齋藤三十四 選

兼・席題共二句以内・締切一時
半厳守・出句は出席者に限る
(会場受付)

賞 各題優秀句に東大阪市長賞・
その他

賞 五百円

会費 二百円(会場にて受付)

第二部 懇親会

主催 東大阪市文化連盟
東大阪川柳同好会
東大阪 市
東大阪市教育委員会
後援

考えの古さの中の人情味

一本の柳が主役夏芝居

衣食たる暮しの中の古畳

古い事となり近所は良く覚え

吾れも又古く成りつつ古き恋う

古傷が伴せすぎる日に疼く

早朝公園老いの喚声高し

楊柳の軸一幅の老閑居

この町で古いつき合い三代目

とび出した妻は公園一廻り

駒つなぎ句会

里

たわむれに歌わぬ父の木挽唄

出雲屋の鰻で順番待つ命

たわむれの矢が人妻の胸を刺す

養殖の鰻に舌を馴らされる

善人であり巻き添えの中に居る

巻き添えの始末書母印まで押させ

三代目老舗にあぐらかいて

チンピラの頭をはねているあぐら

妻が拭く鏡のくもり気に要らず

国鉄の赤字まひしているあぐら

巻き添えというには惜しい人と住み

月給日父のあぐらには大き過ぎ

咳一つ座り直しているあぐら

鰻屋がうちわで匂いあおり出し

たわむれの指切りに馴れている女

たわむれに恋はするまじ距離を置き

たわむれに見えても蝶の生きる道

でかいあぐらがチャンコ鍋囲む

あぐらかく座禪の耳に蚊がとどく

たわむれのつもの指を握られる

宣子

淳子

富子

知也

二咲子

フクヨ

秀雄

隆恵

勇次

三幸

小路報

桐下

雀踊子

恭太

弘生

千代三

柳伸

綾女

小路

育園

信治

白兎

雅風

恒明

美乙女

美代

勝美

みずほ

誓二

酔々

小松園

川柳高知

反対もあるが男の決めた道

偶然の出会いが決めた共白髪

声のみで暮す絆の愛と愛

再婚が自由か夜の雨を聞く

風鈴とスタレ平和な国の夏

生命あせた指へ火花が一つ消え

流れ星お願いごとが多すぎる

間において心静かに新茶汲む

三ヶ月慌てて式を繰りあげる

予定日の二ヶ月早く産気づき

身内だと解り慌てた事故現場

植木との話が出来た老の趣味

玄関の風情植木の葉が落ちる

行幸の記念樹幸せそうに伸び

地震より津波が恐い浜に住み

しばらくは机の下のゆり戻し

年金のお礼どなたに申そうか

小鳥の死少女は石をひとつ置き

虹川柳倶楽部(唐津市)

日ぐらしの声をかき消す通信車

デパートの水柱係と憩の場

生活の苦もなく犬は昼寝する

雑草を抜いて繁殖力を知り

一本の丸太も橋の役をする

いつ迄も若い気であるワンピース

出世より平和な家庭が志望され

原子力断念すれば活路ある

病床の髭だけ生きている日の長さ

今日も又上を吹く風にじむ汗

川竹

松風報

長坊

十一歩

菊野

桂結

紅雨

節子

克子

登子

麗子

ヒサ

海州

鹿絃

青十

芽果

朱坊

紀人

喜久

松風

新岡回天子報

勝一

久仁於

義美

一竿

二二三

烟中

嵌

拘治

虹汀

岸和田市文化祭参加

第29回市民川柳大会

日時 昭和54年10月14日(日)

十二時半〜十七時

会場 岸和田市民会館地下会議室

柳話 川柳塔社主幹 中島生々庵

兼題 「這う」 深日白光子選

「逃げる」 菊沢小松園選

「退屈」 八木摩太郎選

「花道」 榎本 聡夢選

「ぜいたく」 西尾 栗選

「なさけ」 高橋 操子選

席題 (当日二題発表・兼席題各一句)

呈賞 市長賞、議長賞、教育委員会賞、文化協会賞、岸和田川柳会賞

締切 十四時(出句は出席者に限り)

入選句集代 三〇〇円

主催 岸和田川柳会

後援 岸和田教育委員会

岸和田文化協会

岸和田市土生町一九八九〜八

高橋操子内

岸和田川柳会

電話〇七二四(22)〇四九

電話〇七二四(22)〇四九

電話〇七二四(22)〇四九

電話〇七二四(22)〇四九

電話〇七二四(22)〇四九

電話〇七二四(22)〇四九

電話〇七二四(22)〇四九

漸くに人生の暇今日は趣味の会

勝山双葉川柳会(大阪府・河野

夏の宵湯上り句うところてん

冷たさが体を通る滝の音

老いてなお手仕事心のかてとなり

しまい風呂今日一日がかけめぐる

背の子に話しかけつつ落葉たく

背丈越え批評家めいて親を見る

バーゲンに群がる主婦の眼女の眼

足音を聞いてからの酒のかん

雨の音久しく逢えぬ人がいる

子が入る円をいつでも書いてる

にた川柳会

内心は雨祈つて日曜日

望郷の臉にうつる太い虹

雑草もすっかり踏みぬ生きている

パチンコの自慢ができて職がない

夫婦とて時に模造の演技する

夫婦とは夫の残した鯛つく

ドサ廻り判官役が風邪で寝る

おだやかに訓して筋は通しとき

写経して亡母へせんげの日がつく

荇藻が来て空白を埋めてくれ

よく降ると雨をはめてるわけなし

人通り絶える頃からロマンが出

人出の割に賽銭集まらず

言い訳があるから労使も平行線

旅の夜は雑事を流す湯につかる

これでよしそんな日もなく黄昏れる

もめ抜いて出た結論が物足らず

逢う迄の時の狭間で燦る火

黒を着て寡婦とは惜しい齡と聞く

過去はみな流すつもり差し向い

回天子

君子報

千里

田鶴子

千世子

裕子

寿代

英子

久子

節子

智子

君子

早苗報

可保留

虎秋

正朗

芳子

独仙

鉄火人

登美也

軒太楼

きみ

草

木公

静代

亀甲

幹伸

秀子

九老

弘朗

寿美子

早苗

緑之助

堺市農協つため川柳会 南川

草むらで夏の休みを待つ古巣

標本は夜店で間に合う夏休み

夏休み宿題だけけが気に入らず

夏休み子供宿題マダ夢中

夏休み自転車ラッッシュに悩まされ

主婦業に一度はほしい夏休み

夏休みロマンビルで聞かされる

大鵬の兄と物言た夏休み

川柳わかやま

善人はあきれる程の荷を背負い

灯籠を流せば川の浄らかさ

孟蘭盆の酷暑を篠いでいる法衣

桃太郎の川秘境にありそうで

汚されても川には流れる海がある

あきれても見送る顔に絆持つ

あきれる程食べて包丁に喜ばれ

迎え火の明かりへ亡母を呼びもどし

怪我が出て未熟では済まされず

未熟でも楽し今日の阿波踊り

うら盆へ想い出を握る道に佇ち

未熟なる演技舞台を風が抜け

人絶えた橋の吐息も聞いた川

盆踊り亡父のゆかたで音頭とる

盆が来てやっと思いつてくれはった

位牌の裏をそつと覗いてみるお盆

まだほんの未熟ですがと舞う扇

亡父を偲べば人生訓の川である

白無垢を着けて未熟を捧げます

人間の未熟名刺を派手に刷る

★

▼省スペースにご協力ください。ご通報の句

は、なるべく本誌読者だけをお願いします。

昌水報

ミツエ

維久子

登志子

晴子

昌水

美乙女

宏子

摩天郎

和史報

雅風

正博

きみ

与史

弘生

佐知子

十郎

ゞ女

寿子

白光子

千代

頼次

凡九郎

寿馬

天彦

武雄

英子

武雄

昭和54年度 大阪文化祭

第31回 川柳大会

日時 昭和54年10月21日(日)

午前10時開場・午後1時締切

・開会

中央公会堂(3階小集會室)

地下鉄・淀屋橋中之島公園内

「鶴林寺の来迎壁画」

大阪市立美術館長 岡崎讓治氏

「時事雑詠」 広瀬反省選

「御堂筋」 西村芳川選

「ベツト」 米沢俊夫選

「雲」 前田美巳代選

「中流」 堀江としを選

「人」 西尾 葉選

当日4題発表

各題2句(締切1時) 出句は

出席者に限ります。(兼題・

席題共、当日会場で受付)

席題・兼題とも秀句に、府知

事・大阪市長・府・市教育委

員長から「川柳賞」選者から

「選者賞」を贈呈します。

入選句集代三〇〇円、当日申

込受付

主催 大阪府・大阪市・大阪府教育

委員会・大阪市教育委員会

各柳社

協力 協賛

日本川柳協会

募集

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (10句) 若本 多久志 選
 水煙抄 (10句) 川村 好郎 選
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「贈り物」 内海 幸生 選
 「ツリ」 榎本 吐来 選
 「年越し」 小西 無鬼 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

一月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (10句) 若本 多久志 選
 水煙抄 (10句) 川村 好郎 選
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「年賀ハガキ」 高橋 千万子 選
 「運勢」 谷 真風 選
 「猿」 白井 三林坊 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
 ★用紙はなるべく柳葉をこ使用ください。

常任理事会は10月 4日 5時から

定価 四百円 (送料29円)

半年分 二千五百円 (送料共)
 一年分 四千八百円 (送料共)

昭和五十四年九月二十五日印刷
 昭和五十四年十月一日発行

大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
 編集兼 発行人 中島 蓬太郎
 印刷所 藤原 童心社

〒542 大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
 発行所 川柳塔社
 電話 大阪・二七一一三九八五番
 振替口座 大阪・三三三六八番
 普通預金口座番号・一〇二七八三

本社十一月句会

日時 十一月七日 (水) 午後六時
 会場 金属会館
 南区鰻谷東之町10番地
 地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
 電話 271・3935番

柳話
 (今月の出題・香川酔々 琴)
 兼題 効用 黒板 逆コース 据え置き
 席題 二題 当日発表
 会費 三百円

★投句だけの方は切手百円封入

各題三句以内厳守

川柳塔社
 12月の兼題 「夜警灯」 「商店街口下手」

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
 大阪市南区鰻谷中之町20

11月の常任理事会は5日(月)

お買物は
 4都を結ぶ
 大丸へ!



・ペンペン草・

54年度の二賞決定

★第14回路郎賞（女性ばかり）と第13回川柳塔賞がきまった。54年度のロードレースがおわたったわけだが、55年度のスタートはすでに前月号から切られていく。

芥川賞と直木賞

★本社の二賞発表のころには「文芸春秋」の秋の二賞も発表される。小むずかしいことや理屈っぽいことは、もっともにが手とするほくだから、いきおい「直

木賞」に熱中してしまう。

★「文春」の二賞の選評がまた楽しい。各選考委員の個性の違いなど、読者として勉強になることが多い。

★ぼくなど意地悪くうちの選考委員は、どんな色の作品を推すが、受賞作以前にこのほうがたのしみである。こんな読者がいるから選考委員もシンドイことである。しかしそれだけに

▼葉子コーナー

▼家の中を吹き抜ける風も秋になりました。居人さんや天笑さんと食事を共にしますと一段と食欲が出て、二人共お箸も食べてるように感じます。

▼私は割箸の香りが大好きです。一年で日本で使う木の割箸は約、百億膳といわれております。

▼利休は客をもてなす日の朝、赤杉の箸材を人数に応じて削り、杉の香りを供したといわれています。

▼最近北海道産のエゾマツ等で生産され、利休翁のように風流を保つのは難かしいようです。

敬意も深いわけだ。今年もご苦労さまでした。

★路郎先生がよくいわれたことに、「みんな上手になつて」小型路郎の作品ばかりが誌上にずらっとならぶようなことになれば読者は退屈してしまうだろう。

正に至言であるとおもう。豆秋さん（ぼくの場合、この方）目をかけていただいたので「先生」と書くべきだが、この人には「さん」のほうが親しみがわく。

のような異色作家は、選者が創り上げるのである。豆秋さんの投句を毎月拝見したが、ぼくにでも作れるような句がたくさんあった。

毎月三十句以上出されているが、路郎先生は「豆秋川柳」でないと抜かれなかった。だから、三句より活字にならぬことが多かった。実に九割位どが没だったわけである。

★豆秋さんの句をうっかり出した人がある。それが「秀句鑑賞」にも出て、A氏からご注意をうけたことだが、もし「二賞」候補にでも推されたら大変だという。ごもっとも。A氏は豆



ご進物に重宝な
近鉄の商品券

★500円から50,000円まで各種ございます
先様にお望みの品をお選びいただける
手軽で便利な贈答品です 二進物には
近鉄の商品券をどうぞ

近鉄百貨店

ア/店 06-624-1111 上本町店 06-779-1231 奈良店 0742-33-1111

秋句集「ふるさと」の第三版のあるページに出ているという。ぼくは第三版を持っているのでA氏の申し分は間違いないようである。作者から詫言状が来てその句を取り消してくれとのことだったが、すでにとは気にしないので今までもうり投句してもらうようにしておいた。誰にでも潜在意識があつて失敗することがあるものだ。

★豆秋さんには悪いが「ふるさと」に出ている佳句の中に、某社の某好作家の句がそのまま活字になつていく。（某社の某主幹から直

接この話をうかがった）路郎選を縁た豆秋川柳にもこのような失敗がある。今は故人となつておられるのでその句を豆秋さんも取り消すことができいいではないか。

★このような例は故某大作家にもある。

★ま、お互いに出句以前に注意しましょう。

★後記の初校中、薫風さんの「麻生路郎」が社団法人日本図書館協会の第一四二五回の選定図書に決定された、という朗報がもたらされた。おめでとう。

不二田一三夫

カッケ 肉体疲労時の
ビタミンB₁補給に

アリナミンA

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA 25ミリ錠のほかに5ミリ錠



美の殿堂 大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は 日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む 有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時

▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

近鉄



果実入りはワタナベ



グラス六杯
大型600ml瓶
わすか70円

サントリー
果汁入りの
オレンジ
ジエード

標準中味価格瓶保証金300円別

